Title	シンボリック相互作用論序説(2)―コミュニケーションの社会学理論―
Author(s)	桑原, 司
Citation	経済学論集=Journal of economics and sociology, Kagoshima University
Issue Date	2000-11-25
URL	http://hdl.handle.net/10232/10421
Rights	

シンボリック相互作用論序説（2）

── コミュニケーションの社会学理論 ──

桑　原　　　司

第3章　再形成されるものとしての社会

ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，社会なるものは，「動的」なものと捉えられなければならない。すなわち，社会とは，個々人による自己相互作用の営みに媒介された社会的相互作用の過程を通じて，形成・再形成されるものと捉えられなければならない。これが，ブルーマーのシンボリック相互作用論における「動的社会」観の内実であった。前章の議論で明らかにされたのは，このうちの前者の内実，すなわち，社会の「形成」のメカニズムであった。本章は，後者の内実，すなわち，何故に社会は「再形成」されるものと捉えられなければならないのか，その論理的必然性を，自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに明らかにすることを，その目的としている。

さて，前章までの議論で明らかになったのは，ジョイント・アクションが未だ成立していない状況から，人々の社会的相互作用（＝シンボリックな相互作用）を通じて，「共通の定義」が形成され，その「定義」に基づいて，ある一定の形態のジョイント・アクションが成立し，そうしたジョイント・アクションが，その共通の定義に支えられることによって，固定化され規則化されてゆくそのプロセスであった。すなわち，明らかにされたのは，社会の形成メカニズムと，形成された社会の規則性・安定性・再起性を説くブルーマーの立場であった。とはいえ，他方でブルーマーは，「ジョイント・アクションの経歴は，多くの不確定の可能性にも開かれているものと捉えられなければならない」(Blumer, 1966＝1969a, p.71＝1991年，92頁）とか，「不確定性や偶然性や変容が，ジョイント・アクションという過程の本質的な部分」（Blumer, 1966＝1969a, p.72＝1991年，92頁）であると認識されなければならない，と述べている。すなわち，「ひとつの社会を構成するさまざまなジョイント・アクションが，固定化され確立された経路に沿うように設定されているとする想定は，全く根拠のない仮説である」(Blumer, 1966＝1969a, p.72＝1991年，93頁）というのが，ブルーマーが本来「社会」というものに対して抱いているものの見方なのである。こうした観点に立つならば，必然的にジョイント・アクションとは「ひとつの完全な状態から別の完全な状態へと急に変化するものではなく，いつでも不完全な状態を保ちつつ発展を続けるもの」と捉えられなければならないことになる(Blumer, 1966＝1969a, p.77＝1991年，99頁)。すなわち，社会（ならびにそれを構成するジョ

イント・アクション）とは，絶えず変容を経験するもの，したがって，たとえ固定化されたジョイント・アクションであっても，それは常に変容への可能性を持つものと捉えられなければならない，とブルーマーは考えていることになる。

さて，本章の冒頭で示した目的に照らした場合，本章でなされなければならない作業は，そうした固定化されたジョイント・アクションであっても，他のジョイント・アクションと同じく，常に変容への可能性を持っているものであることを（つまり，ジョイント・アクションの構造化が危ういところで一時的に成立しているものであることを）明らかにすることである。無論，上記にも述べたように，そうした作業は，ブルーマーの自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに行われなければならない。本論の目的を図示するならば，以下の図式において，「→→」の部分が，理論上絶えず起こり得るものと捉えられなければならない，その理由を明らかにすることである。

ジョイント・アクションの成立→その固定化→→その変容（ないしは解体）→また別の形態の新たなジョイント・アクションの成立[1]

何故にジョイント・アクションの経歴は，多くの不確定の可能性にも開かれているものと考えなければならないのか。何故に不確定性や偶然性や予期せぬ変容が，ジョイント・アクションという過程の重要な特質として認識されなければならないのか。こうしたことを自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに明らかにするということは，すなわち，自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに，ジョイント・アクションの規則性・安定性・再起性が維持され続けるということが事実上不可能なことである，ということを明らかにすることを意味する。換言するならば，規則性・安定性・再起性が維持され続けるという状態が成立する可能性が存在し得ないということを，自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに明らかにすることに他ならない。

前章において明らかにされたように，ブルーマーのシンボリック相互作用論において「共通の定義」とは，「有意味シンボル」のことを指していた。したがって，共通の定義が維持されている状態とは，有意味シンボルが維持されている状態であると言える。ではそうした有意味シンボルが維持されている状態とは如何なる状態であったか。先に明らかにしたように，それは，社会的相互作用に参与している個々人が，そこで用いられている身振りに対して，各々の自己相互作用の過程を通じて，同じ意味を付与している状態であった。別言するならば，社会的相互作用に参与している個々人が，各々，互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」という二つの観点を，「考慮の考慮」を通じて，適切に把握している状態を指していた。こうした状態を指してブルーマーは，「ある身振りを呈示している人間が，その身振りが向けられている他者と同じように自分の身振りを見ている」状態であると表現している（Blumer, 1993, p.179）。こうした状態が維持され続けるためには，身振りを呈示している人間は，その身振りが向けられている他者を，ある一定の見方でその身振りを見ている他者として（ないしは，これこれの観点を持っている者として）解釈・定義し，かつそうした解釈・定義が妥当なものであり続けなければならない。さらに正確に言えば，そこで身振りを呈示している人間が想定した他者のある一

定の見方が，実際にその他者が採用しているある一定の見方と正確に合致し続けなければならないこととなる。とはいえ，そうしたことを事実上不可能にする特性がこの他者にはある。

本論第1章で明らかにされた知見をここで要約的に再構成することとしよう。

人間は，その人間にとって外的領域に存在する「現実の世界」(world of reality）のなかに住んでいる。そうした現実の世界のある一定の部分を，人間が，ある一定の「パースペクティブ」(perspective）にしたがって知覚（すなわち，自己相互作用を通じて解釈・定義，ないしはその一定の部分に「意味」を付与）したものが，その人間にとっての「対象」(object）に他ならない。人間にとっての「世界」(world）とは，こうした「対象」からのみ構成されているものと，ブルーマーにおいては捉えられていた。すなわち，現実の世界とは一方では，それに対峙する人間によって意味を付与され「対象」として加工される（すなわち解釈・定義される）存在として捉えられていた。とはいえ，他方で現実の世界は，そうした人間による解釈・定義に対して，いつでも「語り返し」(talk back）する可能性を持った存在としても捉えられていた。またそうした「語り返し」を契機として，人間は，自らの解釈・定義の妥当性の如何を知ることとなり，既存の解釈・定義を修正することとなる。さらに言えば，そうした語り返しが生じる可能性がいつでもあるが故に，人間と現実の世界との関係は，絶えず，再形成されてゆく可能性を持つことになる。すなわち，ある時点において，人間が現実の世界に対して適用した，ある一定の解釈・定義が，妥当なものとしてそこで永遠に固定化され続ける，ということは事実上不可能なことと捉えられなければならないことになる。別言するならば，人間にとって現実の世界とは，決して，そのありのままの姿を捉えることができない，不可視的な存在であり続けるものと捉えられなければならないことになる。

さて，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，ある個人にとっての他者という存在もまた，そうした特性を持つ「現実の世界」の領域に存在するものと捉えられている。人間が，現実の世界から，ある一定のパースペクティブにより切り取ったものが「対象」であり，そうした「対象」は，便宜上「物的対象」,「社会的対象」,「抽象的対象」の三つに大別され，そのなかのひとつ「社会的対象」の範疇に他者という存在が含まれていたことからも，そのことは理解されよう。すなわち，人間は，現実の世界に対峙しているのと同じように，「他我（alters）に対して〔も〕対峙している」(Blumer, 1962＝1969a, p.81＝1991年，105頁）のである。したがって，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，ある個人にとっての他者という存在もまた，いつでもその個人によるその他者に対する解釈・定義に対して，「語り返し」する可能性を持った存在と捉えられなければならないことになり，またそうした語り返しを契機として，個人は，自らの解釈・定義の妥当性の如何を知り，その結果として既存の解釈・定義を修正することになる，と捉えられなければならないことになる。また同様に，そうした語り返しが生じる可能性がいつでもあるが故に，その個人と他者との関係は，絶えず，再形成されてゆくものとなる。すなわち，ある時点において，その個人が，その他者に対して行ったある一定の解釈・定義が，妥当なものとしてそこで永遠に固定化され続ける，ということは事実

上不可能なことと捉えられなければならない。それ故，ある個人にとって他者という存在もまた，決してそのありのままの姿を捉えることができない，不可視的な存在であり続けるものと捉えられなければならないことになる。またそれ故にであろう，メルツァーらも言うように，人間の行為とは，それを見る他者から見て，本質的に「予測不可能なもの」（unpredictable）（Meltzer et al., 1975, p.61）と捉えられなければならない。社会的相互作用に参与する個々人を，互いに相手が不可視的な存在となっているものと捉えなければならない，とするこの認識は，ストラウスらにも見られる。その点についてストラウスらは，以下のように述べている。

「人間がおかれている状態とは次のように描写し得よう。すなわち，人間は，しばしば，お互いに，本当のところ相手が何者であるのか完全にはわからないまま（without full surety of knowing one another's true identity）行為している」（Glaser and Strauss, 1965, p.13＝1988年，13頁）。

以上ここまでの議論を踏まえるならば，次のように結論づけることができる。すなわち，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，「共通の定義」なるものが永久に維持され続けるということは，事実上不可能なことと捉えられなければならない。何故なら，共通の定義が維持され続けるためには，身振りを提示している人間は，その身振りが向けられている他者を，ある一定の見方でその身振りを見ている他者として，「自己相互作用」を通じて，解釈・定義し，かつそうした解釈・定義が妥当なものであり続けなければならないが，解釈・定義されるその他者には，いつでもそうした解釈・定義に対して「語り返し」する可能性がある，という特性があり（他者の「不可視」性），それ故，そうした解釈・定義が修正されなければならない可能性がいつでも存在していることになるからである。

ブルーマーは，その1966年の論考において，「集団生活〔＝ジョイント・アクション〕の確立されたパターンは，同一の解釈図式が絶えず用いられ続けることによってのみ，存在し維持される。そして，そうした同一の解釈図式の使用は，他者たちによる〔同形式の〕定義活動（the defining acts）により，確認され続けることによってのみ，維持される」（Blumer, 1966＝1969a, pp.66－67＝1991年，85－86頁）と述べているが，上記の議論を踏まえるならば，社会的相互作用において，ある個人が，自らが社会的相互作用を営んでいる他者に対して解釈・定義を行うに際して，同一の解釈図式を繰り返し用い続けることは不可能なことと捉えられなければならない。すなわち，個人が対峙している他者の「不可視」性により，その個人が同一の解釈図式を絶えず使用し続けることは不可能なこととまず捉えられなければならない。また他者たちが同形式の定義活動を行い続けることもまた，同じく不可能なことと捉えられなければならない。なぜなら，その個人という存在もまた，その他者たちから見れば，まさしく「不可視」性を有した他者に他ならないからである。それ故に，社会的相互作用に従事する個々人は，めいめい，絶えず「再定義」を，すなわち，既存の解釈図式の修正を余儀なくされることとなる。人間間の社会的相互作用においては，こうした再定義が頻発する故に，人間の社会は，絶えず形成・再形成を経験するという意味で「動的」な性格をもつこととなる。そのことについてブルーマーは，以下のように述べている。

「集団生活の既に確立されたパターンというものは，単にひとりでに維持されているのではなく，何度も繰り返される確認という定義（recurrent affirmative definition）によって，その持続性を保障されている。このことを認識することはきわめて重要である。こうしたパターンを維持している解釈が，他者からの定義が変化することによって，浸食されたり崩されたりすれば，そうしたパターンはすぐにも崩壊し得る。このように解釈は，他者による定義活動に依存している。また同時に，こうした事実によって，何故にシンボリックな相互作用が，集団生活を構成するジョイント・アクションの形態をきわめて顕著に変化させるのか，が説明される。集団生活の流れのなかでは，参与者たちが互いの行為を再定義している無数の時点が存在する。・・・・〔そしてこの〕再定義が，人間間の相互作用に形成的な性格（formative character）を与えるのであり，さまざまな時点において，新たな対象，新たな認識，新たな関係，新たな行動様式を生み出すのである」（Blumer, 1966＝1969a, p.67＝1991年，86頁）。

以上，本章における議論からも明らかになったように，ブルーマーのシンボリック相互作用論のパースペクティブからするならば，「共通の定義」が永久に維持され続けるということは事実上不可能なことと捉えられなければならないのである。またそれ故に，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，ジョイント・アクションなるものは，それが如何なる状態にあるものであれ，本来的に再形成への可能性をいつでも持っているものと把握されなければならないのであり，そうしたジョイント・アクションから構成される「社会」もまた，等しく，再形成への可能性をいつでも持つものと把握されなければならないことになる。

以上，本章においてわれわれが描き出した，ブルーマーのシンボリック相互作用論のパースペクティブから見た「再形成されるものとしての社会」という社会観は，従来のわが国のシンボリック相互作用論理解が捉えてきた社会観とは，やや趣を異にしている。

わが国におけるこれまでの主流の解釈（例えば，船津，1976年；田中，1971年；村井，1974年）は，皆川も言うように，シンボリック相互作用論の描く人間観を，道徳的な主張を盛り込んだものと捉えてきた。すなわち，「日本における従来のシンボリック・インタラクショニズム〔＝シンボリック相互作用論〕解釈は，この『行為者主義』の背景に倫理的道徳的な観念を置き，この社会学を，『近代的自我』の『社会に拘束されない自由な人間の主体性』を理論的に保障し，パーソンズ社会学に対抗して社会学理論におけるこの意味での人間主体性の復権を唱えるもの」と考えてきた（皆川，1989年，81頁）。例えば，皆川によって「これまでの主流の解釈」を標榜する一人とされている船津　衛は，そのシンボリック相互作用論理解において，「人間」を，個人を抑圧する（とされている）「管理社会」に対抗し，そうした「社会」を改革しようとする存在として捉えている。そうした「人間」が船津の言う「主体的人間」であった。この点について船津は，以下のように説明している。

「シンボリック相互作用論が，今日のアメリカ合衆国において，急速に頭をもちあげてきた原因は，何よりも，アメリカ社会の現実に求められる。現代のアメリカ社会は，社会矛盾が激化し，管理社会化の傾向は一層進行し，人間疎

外は深刻化し，そして世代や男女間，また人種間の対立が顕在化してきている。シンボリック相互作用論は，これらの問題を，ある程度，意識し，自覚し，反映しているものである。そして，また，それは，このような社会の情勢に対し，抵抗したり，あるいは逃れようとする人々の行動を問題とするものとなっている。脱組織現象，逸脱行動，精神異常，・・・・内容的にはいわば，『与えられた役割期待を，必ずしもそのまま取得せず，それから離れ，それを変更し，さらにそれとまったく異なることを行なう』人間と社会の現象である。シンボリック相互作用論は，それらを，『解釈過程』を通じての人間の主体性の問題として取り扱っていることになる。加えてさらに，シンボリック相互作用論は，このような社会を変革し，それに代わる新しい社会のあり方を求めるものと，その社会観において共通するものをもっている。・・・・シンボリック相互作用論は，激化する矛盾・対立，深まり拡がる阻害の現実を克服せんとする人々の主体性を問題とするものである」（船津，1976年，19－20頁）。

こうした船津のシンボリック相互作用論理解は，シンボリック相互作用論を「『矛盾と頽廃と混乱にみちた実体』としての既成社会に背を向けて，個人を基盤としながらもうひとつの社会を構築」せんとする人々の意欲と行動に，その理論内容が見合うものと捉える田中の見解[2]を典拠とするものであった[3]。すなわち，これまでの解釈は，「社会が抱えている欠陥や問題点を改め，より望ましい方向に社会を変える」（濱嶋，1982年，150頁）という意味での「社会改革」の担い手として，人間という存在を捉えてきた，と言っても過言ではない。換言するならば，これまでの理解は，社会の再形成の必然性を，社会を「変革」しようとする個人の「主体的」意図によって説明しようとしてきた，と言える。とはいえ，本章で明らかにされた基本的思考を踏まえ，さらに，「シカゴ学派シンボリックインタラクショニストたち〔ブルーマー，ヒューズ，ストラウス〕が示す道徳的主張を盛り込んだ社会学への反感」（皆川，1989年，81頁）を見るとき，わが国の従来の主流解釈が妥当性を欠くことが理解される。

本章で明らかにされたように，ブルーマーのシンボリック相互作用論からするならば，「社会」とは，個々人が余儀なくされる不断の再定義の結果として変化してしまうものと捉えられているのであって，意図的に変化させられるもの，ないしは変化させられるべきものと捉えられているわけではない。こうした見解は，ストラウスらの議論とも符合する。以下のストラウスらの描写を見ても分かるように，シンボリック相互作用論のパースペクティブからするならば，「社会」（＝相互作用）とは，むしろ，個々人がそれを意図的に変化させることが困難なもの，と捉えられなければならない。すなわち，社会に参与する個々人にとって，その社会がどのように変化してゆくのかをいつでも正確に予期することは（ましてや，そうした予期に基づいてその社会を統御することなど）きわめて困難なことと捉えられなければならない。

「・・・・相互作用とは，通常，静態的なもの（static）でもなければ，単に反復されて行くというものでもない。ミードにおいて，行為とは，しばしば行為者自身にとっても予期できないほどに，終わり無く展開して行くもの（open ended）なのである。・・・・手短に言うならば，相互作用とは，いつでも変化の可能性に開かれているものであり（tend to go some-

where)，しかも，相互作用がどのように変化して行くのかを，相互作用者がいつでも疑いの余地無く把握出来るわけではない」（Glaser and Strauss, 1964, p.674）。

ストラウスらによれば，シンボリック相互作用論のパースペクティブからするならば，「相互作用は，変化，発展し，決して静止状態にとどまらない」ものと捉えられなければならないのである（Glaser and Strauss, 1965, p.11＝1988年，11頁）。

終章　経験的研究へ向けて——シンボリック相互作用論の研究手法の批判的検討——

第１節　感受概念としての社会観

序章でも述べたように，本論は，シンボリック相互作用論において，個人と社会との関係が如何なるものと捉えられているのか（ないしは論理上，如何なるものと捉えられ得るのか），これを，ブルーマーのシンボリック相互作用論を素材に解明しようとするものであった。すなわち，１）シンボリック相互作用論において，個人の「社会化」（socialization）とは，如何なるものと把握されているのか，２）シンボリック相互作用論において「社会」（society）とは，如何なるメカニズムを通じて，その個人（個々人）により，形成されてゆくものと捉えられているのか，３）また，そうした社会が何故に再形成されてゆくものと捉えられているのか，という三つの問いを明らかにすることが，本論の課題であった。まず，１）について答えるならば，ブルーマーにおいて個人の社会化とは，個人が「他者たちの集団」より，「定義の諸図式」と「一般化された諸々の役割」を獲得し，そうした図式に，自らの解釈・定義を方向付けられること，と捉えられている。こうした社会化を経た個人は，自己相互作用の営みを通じて，自らが対峙する世界との間にある一定の関係を取り結ぶ。「ある一定の関係を取り結ぶ」この営みこそ，ブルーマーにおける「行為」（「個人的行為」）であった。こうした行為が，自己と他者との間で相互に執り交わされている場合，それは「社会的相互作用」と呼ばれる。こうした社会的相互作用は，「非シンボリック相互作用」と「シンボリックな相互作用」に大別され，後者のシンボリックな相互作用を通じて形成されるのが，「社会」より正確には「人間の社会」であった。２）について答えるならば，ブルーマーにおいて「人間の社会」とは，「ジョイント・アクション」（＝「トランスアクション」）が折り重なったものと捉えられているが，そのジョイント・アクションとは，シンボリックな相互作用の「本来的形態」としての「有意味シンボルの使用」と等置される社会的相互作用のことを表していた。こうした意味での「社会」の成立は，個々人が，自己相互作用の一つの形態としての「考慮の考慮」を行うことにより，互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」という二つの観点を適切に把握することにより可能となるものと，ブルーマーにおいては捉えられていた。またそうした適切な把握を可能にするのが，社会化の過程を通じて獲得された「定義の諸図式」と「一般化された諸々の役割」という二つの図式の使用であった。では，何故にこうした「社会」が再形成されるものと捉えられなければならないのか。３）について答えるならば，その論理的必然性は次のように説明される。すなわち，社会がある一定の形態を保ち続けるためには，

そこで用いられている「共通の定義」が永続的に維持され続けなければならないが，共通の定義が維持され続けるためには，身振りを提示している人間は，その身振りが向けられている他者を，ある一定の見方でその身振りを見ている他者として解釈・定義し，かつそうした解釈・定義が妥当なものであり続けなければならないという条件が必要となる。とはいえ，それを不可能にする特性が「他者」という存在にあった。他者の「不可視」性がそれに他ならない。

以上，ここまでわれわれは，ブルーマーのシンボリック相互作用論の「動的社会」観の内実を，自己相互作用 → 行為（個人的行為）→ 社会的相互作用（非シンボリック相互作用，シンボリックな相互作用）→ ジョイント・アクション（＝形成されるものとしての社会）→再形成されるものとしての社会，という順序で明らかにしてきた。田中が，シンボリック相互作用論の論理展開の特徴を指して言う「『個人』から『社会』を説明しようとする発想」（田中，1971年，328頁）がここに顕著に認められる。かつて長田は，社会学理論の内実を，「まず人間の『行為』を観察の拠点とし，それが他者に向けられた『社会的行為』，他者の反応によって行為のやりとりが行なわれる『相互行為』〔＝社会的相互作用〕が社会学の主要な対象となること，そして二人の人間の行為のやりとりから全体社会に至るまでを含む『社会システム』の概念の内実は，相互行為の体系である・・・・」（長田，1981年，71頁）と説明したが，いわば本論は，その内実を，ブルーマーのシンボリック相互作用論の立場から考察したものであるとも言える。なお，長田は，こうした社会システム（社会的相互作用の体系）のうち，「相互行為のパターンが固定化され変化しにくい」状態にあるものを，「構造」ないしは「社会構造」と呼んでいる（長田，1981年，33頁）。こうした知見に照らすならば，ブルーマーにおいて，社会構造とは，先述の，固定化され規則化されたジョイント・アクションのことを意味していると言える。

本論で明らかにされたのは，ブルーマーのシンボリック相互作用論のパースペクティブから捉えた「動的社会」観の内実であるが，極言するならば，「シンボリックな相互作用としての社会」(society as symbolic interaction）という，ブルーマーの良く知られた表現からも分かるように，ブルーマーにとって「社会」とは，まず何よりも，人間間の社会的相互作用（その本来的形態がトランスアクションでありジョイント・アクションであった）が折り重なったものとして捉えられていた。したがって，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，こうした社会的相互作用は，社会の基本的単位に他ならず，それ故に，その基本的単位である社会的相互作用（トランスアクション/ジョイント・アクション）を研究すれば，「人間の社会」(human society）というものが持つ，それ特有の性質が明らかになる。これが，ブルーマーが，シンボリック相互作用論という立場から立てた「社会」に対する仮説であった。

ストラウスらによれば，「社会的相互作用」(social interaction）という現象を如何に捉え如何に説明するかという問題は，社会学にとってきわめて重要な問題であり，M. ウェーバー，W. I. トーマス，パーソンズ，E. ゴフマンという名だたる社会学者たちの名を挙げるまでもなく，社会学の巨匠たちは，皆この問題に取り組んできたという（Glaser and Strauss, 1965, p.9＝1988年，9頁）。彼らによれば，こうした

社会的相互作用を論じる上での最も基本的な問題とは，「相互作用を行っている人々が，どのようにして，相手と自分自身の双方を相互作用者として定義するに至るのか，また相互作用の進展につれて，必要に応じて，どのように再定義してゆくのか，という問題」（Glaser and Strauss, 1965, p.16＝1988年，16頁）であると言う。ストラウスらの言う，こうした「最も基本的な問題」に照らした上で，本論で得た知見を提示するならば，それは次のように描写し得よう。すなわち，社会的相互作用とは，そこにおいて，互いに相手が不可視的な存在となっている個々人が，各々の自己相互作用の一形態としての「考慮の考慮」を駆使しつつ，互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を探り合う（定義し合う）過程である，と捉えられる。すなわち，そこにおいて，個々人は，「考慮の考慮」を駆使しつつ，相手がどのような観点を持った存在であるのか（「相手の観点」），また相手から見て，自分自身はどのような観点を持った存在と捉えられているのか（「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」）という，この二つの事柄を絶えず想定（解釈・定義）し合わなければならない，そうした過程として人間間の社会的相互作用を把握することが出来る。また互いに相手が不可視的な存在となっているが故に，必然的に個々人は再定義を余儀なくされるのであり，それ故に，その相互作用は絶えず進展（変化）を余儀なくされる。これが，われわれが，本論より得た社会的相互作用把握であった。

ところで，ブルーマーのシンボリック相互作用論より得たこの社会的相互作用把握は，彼の方法論においては「感受概念」（sensitizing concept）の範疇に入るものであり，それ故，当然この相互作用把握は，そこより演繹的に理論を構成してゆくその前提として自明視・絶対視されるべきものではなく，その妥当性を個々別々の経験的世界の個々別々の事例に照らして，そうした個々別々の事例が持つ，個々別々の独自性を引き出すという形で，検証されなければならないものとなる（Blumer, 1954＝1969a, pp.148－149＝1991年，192－194頁)。ブルーマー自身も言うように，この社会的相互作用把握は，経験的な検証にかけられ，その経験的妥当性の如何が問われなければならない。もしその妥当性が証明され得なければ，この社会的相互作用把握に固執することは許され得ない（Blumer, 1969b, p.49＝1991年，62頁)。

上記の社会的相互作用把握が，感受概念の範疇に入るものである以上，それは経験的な研究を通じて，別言するならば，ブルーマーの言う，「自然的探求」（naturalistic inquiry）を通じて，更なる洗練をはかられなければならない。では，自然的探求とは如何なる研究手法のことを意味しているのか。そのことについて，以下，若干の議論を行っておきたい。

ブルーマーのシンボリック相互作用論は，三部構成を取っている。そのことについて，ブルーマーは，彼の主著『シンボリック相互作用論』（Blumer, 1969a）の第1章「シンボリック相互作用論の方法論的な立場」（Blumer, 1969b）の冒頭において，次のように述べている。

「私の〔本書第1章における〕論述方針は，まず最初に，シンボリックな相互作用の特性を素描し，次に経験科学における方法論的な原理を明らかにし，最後にシンボリック相互作用論の方法論的な立場を明確にすることである」（Blumer, 1969b, p.2＝1991年，2頁)。

第1部「シンボリックな相互作用の特性」においては，シンボリック相互作用論の立場に立つブルーマーが，研究対象としての経験的世界を分析する際に用いる分析枠組み，ないしはシンボリック相互作用論の「ルート・イメージ」(root images) に関して議論がなされている。本論第1章から第3章で検討されてきたのは，まさにこのルート・イメージの内実であった。続いて第2部「経験科学における方法論的な原理」においては，「経験科学」(empirical science) を志す者なら，誰もが遵守しなければならないとする経験科学の要諦に関する議論，ならびに，その要諦から導き出された経験科学の理想的な研究手法としての「自然的探求」(naturalistic inquiry) 法について議論がなされている。最後に第3部「方法論的オリエンテーション」(シンボリック相互作用論の方法論的な立場) においては，もし研究者がシンボリック相互作用論のルート・イメージを分析枠組みとして採用し，その上で自然的探求を行うとすれば，その研究者は如何なる方法論的な立場に立つことになるかが論じられている。

この三つの構成のうち，第1部の内容については，前章までに論じてきたとおりである。以下では，まず，第2部の内容について議論してゆきたい。

ブルーマーによれば，「経験科学」の一領域を構成するシンボリック相互作用論は，その方法論的なスタンスとして，まず何よりも「経験的世界」(empirical world) の特性を尊重しなければならない (Blumer, 1969b, p.60＝1991年，76頁)。ここで経験的世界とは，研究対象である行為者たちによって営まれている「人間の集団生活」(human group life)，ないしは，そうした行為者たちによる「集合的活動」(collective activity) のことを意味し (Blumer, 1969b, p.35, pp.38－39＝1991年，45頁，49頁)，それは必然的に研究者の外部に位置する領域の事象となる (Blumer, 1969b, p.23＝1991年，30頁)。そして通常，研究者は，こうした世界を「よく知らない」ところから研究を始めることとなる (Blumer, 1969b, p.36＝1991年，46頁)。であるにも関わらず，研究者は通常，「人間が一般的にそうであるように，自らが抱いている既存のイメージの虜である」が故に，「他者〔＝研究対象となっている行為者〕もまた，ある特定の対象を，自分，すなわち研究者が見ているのと同じように見ていると想定してしまう」傾向がある。それ故に研究者は，「こうした傾向を防がなくてはならないし，自らが持つイメージを自覚的に検証するという作業を優先的に行わなくてはならない」とブルーマーは述べている (Blumer, 1969b, p.52＝1991年，66頁)。それを行う手法として，ブルーマーが提示しているのが，自然的探求法に他ならない。ブルーマーによれば，この手法は，「探査」(exploration) と「精査」(inspection) という二つのステップからなる。

まず探査とは，研究者がこれまで馴染みのなかった研究対象の諸側面を「身近に幅広く知る」段階を指す。ブルーマーによれば，「探査的研究の目的は，条件が許す限り，研究領域についての包括的で正確な像を，十分に描き出す」ことにある (Blumer, 1969b, p.42＝1991年，53頁)。つまりこの探査とは，データ収集の行程を意味する (Blumer, 1969b, p.46＝1991年，59頁)。またこの段階において，いわゆる「ヒューマン・ドキュメント」(human document) が援用されることとなる (Blumer, 1939＝1969a, pp.118－119＝1991年，153－155頁)。すなわち，

かつてトーマスとその相棒F. ズナニエッキが，その大著『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』において用いた，インタビュー録，参与観察での聞き取り，個人の生活史，手紙，日記などの「質的データ」が用いられることとなる。

次に精査とは，ブルーマーによれば，「分析のために用いられるあらゆる分析の要素の経験的内容に関する，鋭く焦点を定めた検討であり，同様の検討を分析の諸要素間の関係についても行う」ことを意味する（Blumer, 1969b, p.43＝1991年，55－56頁）。すなわち，この段階において，先に収集したデータの分析がなされるわけである（Blumer, 1969b, p.46＝1991年，59頁）。またここで登場する「分析の要素」（analytical element）が，「感受概念」（sensitizing concept）としての役割を果たすこととなる。すなわち，その分析の要素は，研究者が「経験的事例にアプローチする際に，何を考慮すべきかとか，その事例に如何にアプローチするかについての大まかな感触を与え」，研究対象である経験的事例に接近するための指針をそれを用いる研究者に与える，という役割を果たすことになるのである（Blumer, 1954＝1969a, p.148＝1991年，192頁）。またここで分析の要素とは，具体的には，社会学者が用いる社会学の概念ないしは社会学言語のことを指している（桑原，1997年，69頁，参照）（補注[5]）。なお，ブルーマーの提示するこの「感受概念」という概念については，これまで，わが国においては，主として船津によって，「それ自体，一定の基準や属性を持たず，ただ一般的な方向を示すだけのものであるが，しかし現実に対し，十分な柔軟性を持つものであり，したがって，具体的現実への接近を大いに可能とするもの」である（船津，1976年，71頁）と描写され，ともすれば，感受概念とは，シンボリック相互作用論者以外の社会学者が用いている諸概念とは，その内実の異なった，シンボリック相互作用論の特別製の概念のことを指すかのごとく捉えられてきたが，ブルーマーがその例として「文化」や「制度」そして「社会構造」といった概念を挙げているところからも分かるように，それはむしろ，「ある概念のいわば性格づけ，ないしは使用法」の特殊性を表す言葉なのである（那須，1995年a，45頁）[11]。

さて，こうした二つのステップからなる自然的探求法が含意することは，ブルーマーによれば，「研究の指針となる概念と経験的観察との絶え間ない相互作用」（*continuing interaction* between guiding ideas and empirical observation）であると言う（Blumer, 1977＝1992, p. 154）。換言するならば，自然的探求とは，経験的な観察を通じて，絶えず，研究者が研究対象について抱いているイメージないしは認識を，検証・改訂してゆく営みを意味している（Blumer，1969b，p.40＝1991年，50－51頁；1980, p.410）。では，研究者は如何にしてそうした検証や改訂を行うことが出来る，とブルーマーは捉えているのであろうか。換言すれば，研究者は如何にして，自らのイメージないしは認識が妥当なものであるか否かを知ることが出来るものと捉えられているのであろうか。ブルーマーはそれを，研究対象である「経験的世界」から研究者のイメージや認識に対して発せられる「抵抗」（resist）ないしは「語り返し」（talk back）を手がかりとしてなされ得る，としている（Blumer, 1969b, pp.21－23＝1991年，27－30頁）。

以上，こうしたプロセスによって，「経験的

世界」が「生来的に持っている進行中の性格」(natural ongoing character) を捉えようとするのが，自然的探求の目的である，とブルーマーは述べている[2]。

以上が，自然的探求論の概要である。では，研究者が，シンボリック相互作用論のルート・イメージ（第1部の内容）を分析枠組みとして用い，その上で，上記の自然的探求を行うとすれば（第2部の内容)，その研究者は如何なる方法論的な立場に立つことになるのか。それを説明しているのが，第3部の内容であるが，その第3部において，ブルーマーが提示する立場が，周知の「行為者の観点」(standpoint of the actor) からのアプローチに他ならない。すなわち，ブルーマーによれば，上記の第1部と第2部の条件を踏まえるならば，研究者は，必然的に，その研究手法として「行為者の観点」からのアプローチを行わなければならないことになるという (Blumer, 1969b, pp.47－60＝1991年，60－77頁)。

シンボリック相互作用論の立場に立つ者が，自らの分析枠組みを経験的に検証する際に，研究手法ないしはその手続きの鉄則として遵守しなければならないのが，この「行為者の観点」からのアプローチである。すなわち，それは，研究者が，研究対象となる社会を，それを構成している個々の行為者の立場 (position of the actor) から捉えなければならないとする方法論的要請であった。この点について，ブルーマーは以下のように述べている。

「方法論ないしは調査の観点から言うならば，行為の研究は，行為者の立場 (position of the actor) から行われなければならない。行為というものが，その行為者によって，その人が知覚したもの，解釈したもの，判断したものから構成されるものである以上，それを研究する者は，そこで起きている状況を，行為者がそれを見るように見，行為者がそれを知覚するように対象を知覚し，行為者にとってそれが持っている意味という観点から，その対象の意味を確定し，行為者が自らの行為を組織化するそのやり方にそくして，その一連の行為を跡づけなければならない。要するに，研究者は，行為者の役割を取得し，その行為者の観点 (standpoint of the actor) から，その行為者の世界を把握しなければならない」(Blumer, 1966＝1969a, pp.73－74＝1991年，95頁)。

以下，本最終章では，本論で得た社会的相互作用とは，そこにおいて，互いに相手が不可視的な存在となっている個々人が，各々の自己相互作用の一形態としての「考慮の考慮」を駆使しつつ，互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を探り合う（定義し合う）過程であるという，この社会的相互作用把握を経験的に検証することを，われわれの今後の課題として念頭に置いた上で，その検証作業において鉄則となる，この「行為者の観点」からのアプローチについて詳細な議論を展開しておきたい。かねてより，わが国の研究においては，船津・宝月を中心として，このアプローチの紹介は盛んになされてきたものの，それを実際に実行するに際して生じる諸問題の検討については充分になされてこなかったように思われる。またそれを実際に実行するということは如何なることを意味するのか（本当に真の「行為者の観点」をありのままに把握することなど可能なのか否か），この点についても深い追求はなされてこなかったように思われる[3]。本章では，このアプローチを実際に実行することを念頭に置いた上で，以下，

詳細に議論を展開してゆくこととしたい。

第２節　活動単位の内実

シンボリック相互作用論の立場からするならば，人間の社会とは，それを構成する個々人の行為から成り立ち，そうした行為は，その個人が自己相互作用を通じて行う解釈・定義に基づいて行われているものと捉えられる。それ故に，この立場から社会を研究しようとする者は，そうした個々人の自己相互作用の内奥に入り込まなければならない。換言するならば，社会の研究は，「行為者の観点」ないしは「立場」から行われなくてはならない。これが，ブルーマーの言う，「行為者の観点」からのアプローチの枢要点であった。そのことについて，ブルーマーは，以下のように説明している。

「社会学者ないし人間の社会を研究しようとする者が，活動単位（acting unit）に関心を持つ限り，シンボリック相互作用論の立場からその研究者に要求されるのは，人々〔活動単位〕がそれを通じて自己の行為を構成する解釈の過程〔＝自己相互作用〕を把握するということである。・・・・この過程を把握するためには，研究者は，自らが研究している，行動を行っている活動単位の役割を取得しなければならない。・・・・こうした事実を認識していたが故に，R. E. パークやW. I. トーマスといった学者の調査研究は，あれほど優れたものとなったのである。活動単位の役割を取得せずに，いわゆる『客観的』（objective）観察者の超然とした姿勢で，解釈過程を把握しようとすることは，最悪の主観主義（the worst kind of subjectivism）に陥る危険を冒すことになる」（Blumer, 1962＝1969a, p.86＝1991年，112頁）。

ところで，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，この「活動単位」（acting unit）には，人間個人のみならず，集団も含まれている（なお，相互作用を行う「活動単位」ないしは「行為者」に，人間個人のみならず，集団をも含める，という点については，長田もまた同様の見解を提示している（長田，1981年，33頁））。そのことについて，メインズらは，以下のように述べている。

「・・・・確かにブルーマーは〔個々の行為者による〕意味のやりとり（transactions of meaning）を重視しているが，彼はそうしたやりとりが，あらゆる規模〔の行為者間〕において存在するものと捉えている。これと同じ理由で，彼が行為者に言及する際に『活動単位』（acting unit）という用語を用いていたことを指摘しておく必要がある。すなわち，行為者とは常に個人であるわけではない。それは親族でも，協同組合でも，エスニック・グループでも，国際的なカルテルや兼任役員会（interlocking directorates）でも，それ以外の形態の集合体でもあり得る。さらに言えば，人間の活動は，さまざまな状況のなかで生じ得るが，そうした状況もまた，その規模において変化し得るのであり，対面的な相互作用状況（face-to-face encounters）から経済市場まで，さらには国際的な権力関係にまで広がるのである。・・・・」（Maines and Morrione, 1990, xv＝1995年，11－12頁）。

上記のメインズらの指摘は，以下のブルーマーからの引用によっても裏付けられる。ブルーマーは，以下のように述べている。

「人間の社会は，行為を行っている人々から構成されているものと見なされ，そうした社会の生命は，彼らの行為から構成されているものと捉えられる。〔そうした行為を行っている〕

活動単位（acting unit）〔強調は引用者〕には，個別の個々人や，その成員が共通の目的のために一緒に行為している集合体や，何らかの選挙区を代表して行為している組織（organizations acting on behalf of a constituency）などが含まれる。・・・・人間の社会において，経験的に観察可能な活動は，すべて何らかの活動単位から生じたものである。・・・・現実にそくした分析をしていると主張する，人間の社会に関するあらゆる図式は，ひとつの人間の社会が，諸々の活動単位から構成されているという経験的な認識を尊重し，そうした認識に合致するものでなければならない」（Blumer, 1962＝1969a, p.85＝1991年，110頁)。

ブルーマーによれば，この活動単位に含まれているのが，人間個人であれ集団であれ，そうした活動単位の行為は，等しく，それらが行う解釈の過程の産物と捉えられなければならない（Blumer, 1969b, p.16＝1991年，20－21頁）。またそれ故に，上記の引用にも見るように，そこに含まれているのが人間個人であれ，集団であれ，研究者は，その「活動単位の役割を取得」するという「行為者の観点」からのアプローチを実行しなければならない。これが，ブルーマーのシンボリック相互作用論の主たる方法論的な（研究手法上の）主張である。とはいえ，私見では，もしこの「活動単位」に集団をも含める，とするならば，このアプローチを実行する上で非常に困難な問題が生じることとなる。

再度確認するならば，ブルーマーのシンボリック相互作用論は，その遵守すべき研究手法として「行為者の観点」からのアプローチを採用しているが，それは言うなれば，研究者が，研究対象となる社会を構成する行為者の役割を取得し，その立場から社会を研究することをその内容とするものであった。こうした研究手法を堅持するのであれば，「活動単位」を人間個人と等置する場合には，その人間個人の役割を，そして，集団と等置する場合には，その集団全体の役割を，研究者は取得しなければならないこととなる。とはいえ，後者の役割取得が如何にして可能であるかについて，ブルーマーは充分な説明を用意し得ていない。かつて，J. ターナーは，ブルーマーのシンボリック相互作用論が「ミクロな相互作用過程を強調する方法論を採用してきた」（Turner, 1974＝1992, p.115）と述べ，そうしたターナーの見解を，ブルーマーは，シンボリック相互作用論に対するミクロ主義批判と捉え（Blumer, 1975＝1992, pp.124－125），それに対して反論を試みたことがあるが，ブルーマーは，その反論のなかで，シンボリック相互作用論の研究手法でもマクロな分析が可能であるとして，彼の論考である「労使関係の社会学」（Blumer, 1947）を参照するよう示唆しているが（Blumer, 1975＝1992, p.125），その論考の結論部において，ブルーマーは次のように述べている。

「労使関係の分野においては，大規模で複雑な形式で観察を行わなければならない，というのは，困難なことであるが，現実にそくすためには致し方ないことである。労使関係における観察の意義と近代的な戦争における偵察の意義には相通じるものがある。自らの偵察地点にいる兵士には，その兵士の能力がどれほど優れていようとも，戦場全体で何が起きているのかを知ることは出来ない。社会学者が，ある工場で観察を行う場合にも，間違いなく同じ限界を感じることになるであろう。適切な観察を行うためには，観察者は，そのフィールドで起きていることを感じとり，さまざまな役割を取得し，

さまざまな状況を判断し，そうすることを通じて，そうしたさまざまな事柄を，ある統一された形式にまとめあげるという，困難な作業を行わなければならない。われわれがそれを好むと好まざるとに関わらず，こうした観察が的確なものであるためには，高度な創造力を伴った研究者の判断が必要とされるのである」（Blumer, 1947, p.277）。

この論文を通して，ブルーマーがとりわけ強調して止まないのは，次のことである。すなわち，工場における労使関係（労働者と経営者との関係）を研究するに際しては，１）研究者は，その関係が，「対等な個人と個人との関係」としてではなく，まず何よりも「企業と組合という二つの組織同士の関係」として存在している，ということに留意しなければならないということと，２）研究者は，そうした組織間の相互作用という観点から，両者（労使）の相互作用を捉えなければならない，ということの二点である。すなわち，労使の相互作用を，個人と個人との相互作用という観点からではなく，それぞれの所属する組織と組織との相互作用という観点から捉え，分析しなければならない，というのが，ブルーマーのこの論文の枢要点なのである。その上で，その組織の役割を研究者が取得することは如何にして可能か，ということについて説明しているのが，上記の引用なのであるが，確かに上記の引用を見る限り，ブルーマーは，シンボリック相互作用論の手法による組織の分析（マクロな分析）が不可能であるとは述べていない。すなわち，「活動単位」の範疇に組織（大規模な集団）を含め，その集団全体の役割を取得することが不可能なことであるとは，確かにブルーマーは述べていない。とはいえ，上記の引用を見る限り，そうした役割の取得が如何にして可能であるかについても，ブルーマーは（少なくとも体系的には）説明し得ていない。ターナーを論敵とし，シンボリック相互作用論の手法でもマクロな分析が可能であることを証明するとした，ブルーマーのこの論文は，結局のところ，それが如何にして可能であるのかを説明し得ていない不十分なものであった。

ブルーマーも言うように，彼の企図するシンボリック相互作用論とは，「哲学学説」としてのそれではなく，「経験的な社会科学的パースペクティブの一つとしてのシンボリック相互作用論」（Blumer, 1969b, p.21＝1991年，27頁）であった。すなわち，「人間の集団生活と人間の行動に関する検証可能な知識を生み出すことを，その目的とするアプローチ」としての「シンボリック相互作用論」であった（Blumer, 1969b, p.21＝1991年，27頁）。したがってそれは，ある一定の理論的パースペクティブとそれを検証可能なものにするための実行可能なメソッドとが，一体となってかみ合ったものでなければならない。すなわち，ブルーマーのシンボリック相互作用論の立場からするならば，理論的パースペクティブと研究手法との分離・不整合は許されない。それ故に，もし，「活動単位」という概念に，「集団」をも含めるのであれば，その「集団」全体の役割を取得することを可能とする研究手法もまた，同時に提示されていなければならない。とはいえ，上記にも明らかなように，ブルーマーはそれを提示し得ていない。研究者が，シンボリック相互作用論のパースペクティブを用いて経験的な研究を進めるに際しては，さしあたり，この「活動単位」という概念には人間個人のみを含める，とするのが妥当であると思われる。

ブルーマーのシンボリック相互作用論のパー

スペクティブを用いて，経験的な研究を進めるに際しては，この「活動単位」という概念には，人間個人のみを含めるものとする。その上で，研究者は，この「活動単位」（個人）の役割を取得しなければならないこととなる。とはいえ，研究者による人間個人の役割の取得という営みは，一見容易い作業のように思われがちであるが，そもそも，研究者が研究対象となる個人の役割を（ありのままに）取得することなど，可能な営みなのであろうか。以下では，そのことついて議論してゆくこととしたい。

第3節　行為者の観点とは

仮に，自己と他者という二人の人間によって社会的相互作用が営まれているとしよう。本論で得られた知見を踏まえるならば，そうした社会的相互作用において，二人は各々「自己相互作用」の一形態としての「考慮の考慮」を行いつつ，互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を探り合っている。こうした社会的相互作用把握を理論的・経験的に洗練させたものとして，ストラウスらの議論が挙げられる[4]。ストラウスらは，1964年の論文において，人間間の社会的相互作用を，そこにおいて個々人が，各々本論の言う「考慮の考慮」を駆使することによって，互いに「相手のアイデンティティ」（the other's identity）と「相手の目に映った自分自身のアイデンティティ」（one's own identity in the eyes of the other）の双方を探り合っている過程と捉え，その内実を「覚識文脈」（awareness context）という概念をもとに分析している（Glaser and Strauss, 1964）。ここで「覚識文脈」とは，ストラウスらによれば，「ある状況において，各々の相互作用者（interactant）が，互いに，相手のアイデンティティや，相手の目に映った自分自身のアイデンティティについて知っている事柄の全体的な組み合わせ」（Glaser and Strauss, 1964, p.670）を意味している。なお，ここで「知っている」とは，あくまで知る側による，相手に対する解釈・定義（「意味付与」）の次元で行われていることであり（ストラウスの用語で言えば「名付け」（naming）），知る側が，相手の内奥をダイレクトに把握しているという意味ではない[5]。彼らは，その組み合わさり方の数あるタイプ[6]より，四つの覚識文脈を提示している。先ず第一に，共通の定義が成立していない状態，ないしは意味が共有されていない状態。これは，ストラウスらの言う「閉鎖覚識文脈」（a closed awareness context）を意味する。すなわち，二人の人間（interactant）が社会的相互作用を行っているという状況において，「一方の相互作用者が，他方のアイデンティティ，ないしは他方の観点から見た自分自身のアイデンティティの何れかないしは双方を知らない」という状況を意味する[7]。次にそうした状態から意味の共有へと移行してゆく過渡的な状態。これは「疑念覚識文脈」（a suspicion awareness context）を意味する。すなわち，「一方の相互作用者が，他方の本当のアイデンティティ，ないしは他方の観点から見た自分自身のアイデンティティの何れかないしは双方について疑念を抱いている」という状況を意味する。そして「〔相互〕虚偽覚識文脈」（a pretense awareness context）とは，双方の相互作用者が，完全に「相手のアイデンティティ」と「相手の目に映った自分自身のアイデンティティ」の双方を把握しているにも関わらず，あたかも知らないかのごとく振る舞っている，という状況を意味する。

そして最後に，「オープン覚識文脈」（an open awareness context）とは，「双方の相互作用者が，互いに相手の本当のアイデンティティと相手の目に映った自分自身のアイデンティティの双方を知っている」（そして互いに知っているということを表明し合っている）という状況を意味する（Glaser and Strauss, 1964, p.670)。そしてストラウスらは，この最後の状態を指して，社会的相互作用に参与する個々人が相互に理解し合った状態ないしは両者の間に「有意味シンボル」（＝「共通の定義」）が成立した状態であると捉えている[8]。

では，自己と他者とが相互作用を行っているという如上の状況において，二人の間に如何なる「覚識文脈」が成立しているのかを，研究者が明らかにしようとする場合，研究者は如何なる点に留意しなければならないのか。ひとつには，繰り返すまでもないが，そうした状況を，それを構成している「行為者の観点」から明らかにしなければならない。とはいえ，以下のストラウスらの引用を踏まえるならば，「行為者の観点」からのアプローチとは，その「行為者」の「観点」を鵜呑みにすることと同義ではない。

「たとえば，ある医師が，患者は自分が末期であるということ（＝医師の目に映った患者自身のアイデンティティ）をまだ知っていない，と語る一方で，患者の方は，医師から伝えられている自分の病状をかなり疑っている，という状況があり得る。つまり，この場合，実際には疑念覚識文脈が成立しており，そこにおいて患者は自分の疑念を検証しようとしているにもかかわらず，医師は閉鎖覚識文脈が成立していると思っているのである。ここでもし，医師の方が，患者のそうした疑念を認識すれば，医師は患者のそうした疑念を払いのけようとするかもしれない。そしてもし医師が〔その結果として〕うまく〔患者の疑念を払いのけることに〕成功したと思えば〔実際には成功したかどうかはともかくとして〕，〔社会学者から調査を受けた際に〕，医師は，患者が疑念を抱いていたという事実を述べずに，患者はまだ事実を把握していない，とのみ答えるかもしれない。というわけで，社会学者があるひとつの覚識文脈を確定するにあたっては，いつでも各々の相互作用者の覚識を別々に〔強調は引用者〕確認することが必要とされる。最も確実な方法は，観察なりインタビューを通じて，各々の相互作用者から，〔相手の覚識の状態ではなく〕自分自身の覚識の状態についてデータを得ることである。一方のインフォーマントの言葉のみを鵜呑みにすることは，たとえオープン覚識文脈が成立している〔と思われる〕状況においても危険なことである」（Glaser and Strauss, 1964, pp.670－671)。

すなわち，社会的相互作用に参与している自己と他者とは，互いに相手が不可視的な存在となっているもの，と捉えられる。それ故に研究者が，そうした社会的相互作用を「行為者の観点」から明らかにしようとする際には，当然ながら，研究者は，社会的相互作用において，自己は他者の内面を，他者は自己の内面を，本当のところは把握しきれていない状態にある，という上記の理論的前提を方法論的な前提としても据えた上で，そうした前提に見合った調査方法を採らなければならないことになる。すなわち，ある個人の内面（覚識）は，あくまで，その個人から引き出されなければならないのであり，そうした個人と社会的相互作用を営んでいる他者から引き出されるべきものなのではない。「行為者の観点」からのアプローチを実行する

ということは，その行為者の観点を鵜呑みにするということと同義ではない。あくまで理論算出の素材として考慮するという意味なのである。

とはいえ，ここで忘れてはならないことは，フィールドに調査に入る研究者という存在もまた，そのフィールドにおける相互作用者（interactant）の一人に他ならないという論点である（Denzin, 1970; 1989a）。すなわち，研究者による調査研究という行為もまた，「一つの解釈の過程」に他ならず（Denzin, 1989b），それ故に，研究者（調査者）と行為者（調査対象者）との社会的相互作用もまた，等しくシンボリックな相互作用の範疇に入るものと捉えられなければならないことになる[9]。であるならば，研究者にとってもまた，その人の役割を取得しようと思っている行為者（対象者）は，不可視的な存在としてその研究者に対峙しているものと捉えられなければならないことになる。

先に，本論第 2 章第 3 節で見たように，社会的相互作用において，ある個人が取得する他者の役割とは，あくまで，その個人が，そうに違いないであろうと想定した，その個人の想定する「他者の役割」であった。すなわち，そもそも，個人によるダイレクトな他者の役割の取得など不可能なことと捉えられなければならないということが，そこでは強調されていた。また，個人によるそうした想定が，いつでも正確なものであり続けることなど不可能なものと捉えられなければならないということは，本論第 3 章で見たとおりである。であるならば，研究者が，他者すなわち研究対象となる行為者の役割を取得するに際しても，同じ問題に直面することになりはしないだろうか。

すなわち，研究者が取得する行為者の役割，つまり「行為者の観点」とは，決してその研究者にダイレクトに把握されるものではなく（換言するならば，研究者がそれをダイレクトに把握することなど不可能なことであり），あくまでそれは，究極的には，研究者による対象者の観点に関する想定（ないし解釈・定義）でしかあり得ない。その意味で，研究者による「行為者の観点」の取得という営みは，「対象者の解釈過程に対する研究者の解釈過程」（reconstruction of constructions）（徳川，1999年，15頁）でしかあり得ない。では，その解釈過程の結果として，研究者が対象者に対して適用した解釈・定義の妥当性の如何は如何にしてはかれるのであろうか。別言するならば，研究者は，その「対象者の解釈過程に対する研究者の解釈過程」を如何に対自化し得るのか。先に見たように，ブルーマーは，研究者によるそうした解釈・定義の妥当性の如何を，「経験的世界」からの「語り返し」を手がかりとして検証することが出来るとしているが，では，その「語り返し」をどう処理し，どう自らの解釈・定義を修正（→確定）すればよいのかが，この説明では明らかにされているとは言い難い。その検証の基準の設定がまず課題となろうが[10]，その検討については他日に譲ることにしたい。

社会的相互作用に従事する個々の「行為者の観点」を取得し，その立場から，本論で析出された社会的相互作用把握を経験的に検証することが，われわれの，今後の必須の課題に他ならない[11]。言うなれば本論は，われわれがそうした作業を行うに際して，われわれがその研究の出発点として持つことを決断した，「シンボリック相互作用論」（Symbolic Interactionism）という「パースペクティブの一つ」（a perspective）[12]を，ブルーマーのシンボリック相互作用論を素材に論じたものに他ならない。

注

序章

1）吉原，1989年，24頁，参照。この二つの流れのうち，後者について，吉原は，以下のように述べている。

「〔二つの流れのうち〕一つはHerbert Blumer〔補注[1]〕に代表されるSymbolic interactionismの流れである。自我の探求に焦点を据えて立ちあらわれたこれらの学派は，まぎれもなくMeadの仕事に源を発し，Thomas，Park，Hughesの影を追っていた」（吉原，1989年，24頁）。

ちなみに，フェアリスは，この後者の学派をさして「シカゴ学派第三世代」と呼んでいる（Faris，1967＝1990年，177頁）。

なお，本論は，東北大学審査学位論文（博士）『社会過程の社会学――ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考――』（桑原，2000年a）に加筆・補正を施したものである。なお，本論執筆にあたり，東北大学文学部教授，吉原直樹氏，高城和義氏，東北大学大学院情報科学研究科助教授，徳川直人氏には，多大なるご示唆を頂いた。記して感謝したい。

2）というのも，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，研究手法とは，ブルーマーが分析枠組みにおいて描いているとする行為者が日常的に行っていることを洗練させたものに他ならないからであり（Blumer，1980，pp.415－416; Hammersley, 1989, p.44, p.46），そのため，ブルーマーの研究手法の原型を探るという意味でも，まず以てこの分析枠組みから検討することが必要となるからである。

こうしたブルーマーの立論は，「プラグマティズム」（pragmatism）の思想と深く関連している。プラグマティズムとは，進化論の影響下に19世紀後半のアメリカ合衆国で生まれ，発展を見た独自な哲学思想である。この言葉は1867年に，C. パースが提言した「プラグマティックな格率」に由来し，実用主義ないしは実際主義と訳されることもある。ギリシャ語のpragma（為されたこと）から造語されているのを見れば分かるように，行動の結果，つまり実際的効用を思考に優先させ，人間の思想や概念をそれにもとづいて吟味し理解しようとする技術的思考の立場である。パースは従来の哲学理論に見られる空虚な思弁を排し，観念を明確にする方法として，この言葉のもとに意味の理論を提唱したのであるが，のちジェームズはこれを真理の理論として紹介し普及させた。これがデューイになると，さらに思考を，自然や社会という環境に対する人間の適応行為の一種と見なし，すすんでそのための器具だと解する立場＝道具主義に発展をみた（山崎正一，1993年，535頁）。

シンボリック相互作用論が，「まず何よりもプラグマティズムの影響下にアメリカで誕生」（Martindale, 1960＝1970年，406頁）したことは今や周知のことであるが，もとより，ブルーマーのシンボリック相互作用論の場合も例外ではない（船津，1976年，27頁）。ハマーズレイによれば，プラグマティズムの思想においては，科学や哲学とは，人間の思考の雛形と捉えられていた（Hammersley, 1989, p.46）。そのことについて，ハマーズレイは以下のように述べている。

「科学や哲学は，日常生活における諸問題から立ち現れ，その問題の解決に向けられる。・・・・多くのプラグマティストたちは，科学を，人間の知識がそうあるべき雛形と捉えており，同時に，人間の知識を発展するものとして，その結果として，人間同士の相互適応および人間の環境に対する適応を漸進的に促進するものとして，捉えていた」（Hammersley, 1989, p.46）。

さらにこうした思想が，ブルーマーのシンボリック相互作用論の分析枠組みと研究手法の形成過程に多大な影響を与えた，とハマーズレイは見ている。彼によれば，「シカゴ学派社会学，さらに，ハーバート・ブルーマーの方法論的な諸見解に対して，最も重要な影響を与えた哲学思想はプラグマティズムであった。ブルーマーやそのほかのシカゴ学徒が，人間の社会生活の特性に関する自らの諸見解の多くや，同時に，方法論的な見解のいくつかを引き出したのは，まさにこのプラグマティズムからであった」（Hammersley, 1989, p.44）。

こうした見解を，事実，ブルーマーも認めている。ブルーマーにとって，科学とは，人間の内省的知性の理想的形態を意味する。また科学的手法とは，日常的手法を単に伸長ないしは洗練させたものに他ならない。ミード同様に，ブルーマーのシンボリック相互作用論においても，こうした考え方は変わらない。このようにブルーマーは述べている（Blumer, 1980, p.415)。さらに，ブルーマーが提示する（社会）科学的手法としての「自然的探求」(naturalistic investigation) 法もまた，日常的手法を単に洗練させたものとして，ブルーマーにおいては捉えられている（Blumer, 1980, p.415)。

3) Blumer, 1977; 1980. 詳しくは本論第 1 章第 4 節を参照のこと。

4) Blumer, 1931; Denzin, 1970, p.454. こうしたことは，厳密にいうならば，たとえそれが「翻訳」という研究行為であっても例外ではない（佐藤，1992年，92－97頁，参照)。

5) 学説研究というものを，自らの依拠する視点を明示・自覚した上での創造的解釈と捉え，そうした立場から，シカゴ学派社会学の論考を検討しているものに，宝月，1989年がある。

6) 例えば，船津，1976；1989年；宝月，1990年，参照。とはいえ，ブルーマーのシンボリック相互作用論による，ミード思想の継承の如何については，周知のように，その是非をめぐって種々の論争が繰り広げられてきた。古典的には「自己」(self) 把握をめぐるブルーマーとR. F. ベールズらとの論争，そして，その後に展開された，ミードの人間観，社会観，方法論把握をめぐるブルーマーとイリノイ学派との論争などがその主立ったものである。前者の論争については，稲葉，1973年；村井，1974年，53－54頁を参照。また後者の論争については，伊藤，1998年が詳しい。なお，シンボリック相互作用論とシカゴ学派社会学・プラグマティズム哲学との理論的・学説史的関連を詳しく論じたものに，伊藤，1995年 b がある。

7) それ故に，ブルーマーのシンボリック相互作用論に対しては，それが「主観主義」的な立場を標榜するものであるとする批判が，かねてより寄せられてきた。詳しくは，本論第 1 章第 2 節を参照のこと。

8) 本論第 2 章第 3 節を参照のこと。

9) 拙稿（桑原，1997年，67頁)，参照。また，この点については，本論第 3 章も参照のこと。

10) ブルーマーの諸論考が持つ，こうした特異性を考慮に入れる限り，ブルーマーのシンボリック相互作用論を研究する者には，その者による，ブルーマーの諸言説の，ある一定の観点ないしは視点からの，整理（取捨選択)・統合・洗練という作業が必要となる。ここで求められるのは，その諸言説を一つ漏らさずありのままに提示するという作業ではない。

11) そもそも，何故にブルーマーは，社会が，それ自体のメカニズムに基づいて作動するという理論的立場ないしはパースペクティブを誤りであるとして批判したのか。この点をさらに正確に追求するためには，ブルーマーのシンボリック相互作用論が生まれた土壌であるアメリカ社会とブルーマーの分析枠組みとの関係に関する知識社会学的研究が必要となるが（片桐，1989年，iii；1991年，7－8頁；下田，1987年，349－350頁)，本論ではそれを行う余裕はない。

12) なお，こうした見解は，ブルーマーの論考の随所に見られる（Blumer, 1969b, pp.19－20＝1991年，24－25頁；1966＝1969a, pp.74－76＝1991年，95－99頁；1962＝1969a, pp.88－89＝1991年，114－115頁)。

13) この点については，船津，1988年，351頁；徳川，1987年，69－74頁を参照。ちなみに船津は，以下のように述べている。

「・・・・自我のあり方をミードは『客我』(Me) と『主我』(I) との相互作用として捉えた。自我は他者の期待をそのまま受け入れた『客我』の側面とその客我に対する反応である『主我』の側面から成り立っている。そして主我は客我に対して働きかけ，変容させ，また新たなものを生み出す自我の積極性を表わし，人間の自由や自発性のセンスをもたらすものである」(船津，1988年，351

頁)。

14）本論第1章第2節を参照のこと。

第1章

1）換言するならば，この自己相互作用という概念を看過した社会理論は，もはやシンボリック相互作用論ではない（船津，1976年，19－26頁，参照)。船津も言うように，シンボリック相互作用論による人間の捉え方（「主体的人間」観）は，構造機能主義社会学の人間把握（「社会化過剰の人間観」）に対する鋭意な批判を含み持っているが，シンボリック相互作用論が，そうした人間把握の妥当性を確証する経験的根拠として強調していたのが，個々人の解釈的営みであり，それを捉えるための分析枠組みとして提示していたのが，この「自己相互作用」という概念であった。またシンボリック相互作用論が，そうした人間把握を武器にして，自らの社会学理論としてのレゾンデートルを主張してきた，と言っても過言ではない（船津，1976年，参照)。

2）構成心理学とは，複雑な精神現象を諸要素に分け，そうした諸要素を相互に結合することによって心理現象を説明しようとする心理学の一流派を指し，この流れに位置する心理学者に，W. ヴント，E. B. ティチェナー，W. ジェームズらがいる。この立場では，そうした諸要素として「感覚，心像，感情」などが挙げられ，そうした諸要素を組み合わせることによって，意識内容やその構造を解明しようとする方法論が採られている（外林，1981年，138頁)。なお，こうした方法論を排し，人間の心理現象を，その「内容」ないし「構成」という観点から分析するのではなく，それを，個人の環境に対する適応における「機能」という観点から分析しようとする立場が，「機能主義心理学」(functional psychology）に他ならず，それは，ブルーマーのシンボリック相互作用論立論の出発点となった考え方である（Blumer, 1931＝1969a, pp.155－156＝1991年，203頁；植村，1989年，92－94頁，参照)。

3）『新明解国語辞典　第3版』，三省堂，1985年，における「世界」の狭義の定義を引用。

4）Charon, 1989, pp.39－46，参照。例えば，モールス信号という「言語」を例に取ってみよう。周知のように，モールス信号とは，ある一定の音ないしは光のパターンを，大気中の空気の振動ないしは発光という物流にのせることによって，ある一定の情報を，伝達者から被伝達者へと伝達することを目的として考案されたものである。とはいえ，この信号は，それを理解する能力を持ち合わせていない者にとっては，まるで「意味」を持たないものとして存在することになる。この信号が，ある人間にとって，「意味」あるものとして，すなわち，「対象」として存在するためには，この信号に関する，その人間に対する，他者たちによる定義活動が，まず先行しなければならない。すなわち，例えば，軍隊という集団において，その人間が，その集団に所属している他者たちから，定義活動（軍隊訓練）を受けることで，初めて，その信号がその人間にとって「意味」(情報）あるものとして，立ち現れてくることになるのである。

5）この点については，逸脱行動論におけるラベリング理論の成果にも明らかである（木村，1991年，参照)。

6）Blumer, 1969b, p.5, pp.20－21＝1991年，6頁，26－27頁；1966＝1969a, p.84＝1991年，84頁。

7）なお，船津もまた，人間による自己内コミュニケーション（「自己相互作用」）を，他者とのコミュニケーション（「社会的相互作用」）が内在化されたものと捉えている（補注[2])。

「自己内省的コミュニケーションはそれ自体内部においてなされるというよりも，他者とのコミュニケーションを通じて生み出される。他者とのコミュニケーションを内在化することを通じて，自己とのコミュニケーションが行なわれるようになる」(船津，1996年，116頁)。

8）Alexander, 1987, pp.214－227; Lewis, 1976; Warshay and Warshay, 1986; Zeitlin, 1973, pp.217－218; Coser, 1976, p.157; Stryker, 1980, p.150; Smelser, 1988, p.122.

9）ちなみに，ルイスによる批判は，わが国におい

ても，ブルーマーのシンボリック相互作用論の主観主義的な性格を批判する上で援用されているものでもある（伊藤，1991年，48頁，50頁；徳川，1987年，70－71頁）。

10）なお，同様の指摘は，わが国においても下田によってなされている（下田，1987年，64頁）。またこうした批判は，村井がよりダイレクトに行っている。村井は以下のように述べている。

「〔ブルーマーによる〕ミード理論の『主観主義』は，・・・・『自己存在的実体』としての対象（客観的実在）の存在を軽視もしくは抹消し，対象はそれが行為者にとって持つ意味に従って行為者によって構築されるものとして，対象をあくまで主観による構成物とする主張として現れる。・・・・このようないわゆる『主観的観念論』は，必然的にあらゆる実体概念の軽視ないしは否定につながり，さらには社会の構造的現実の軽視という結果をもたらすことになる」（村井，1974年，58頁）。

ちなみに，一般的には，「主観主義」（subjectivism）とは，「現実に対する人間の知識〔＝意味〕は，人々の主観的な経験や精神〔＝解釈〕によって決められる」とする立場をあらわす用語として用いられている（濱嶋，1982年，186頁）。

11）なお，この点について言うならば，船津もまた，同様の批判を行っている。船津によれば，ブルーマーは，「解釈過程のよって立つ基盤，とりわけ社会とのかかわりを無視し，社会による形成と規定の側面をほとんど閑却してしまっている」と言う（船津，1976年，41頁）。

12）Blumer, 1977; 1980. この二つの論文は，ブルーマーとルイスならびにマックフェイルとレックスロートとの間に交わされた論争という形態をとっている。その経緯を示すならば，まずルイスが，ブルーマーの主著『シンボリック相互作用論』（Blumer, 1969a）におけるブルーマーの立場を主観主義的な性格を有したものであると批判し（Lewis, 1976），それに対してブルーマーが反論（Blumer, 1977），さらにブルーマーの主著における立場とルイスに対する反論における立場の双方について，今度はマックフェイルらが批判を展開し（McPhail and Rexroat, 1979）（内容については後述），その後，ルイスならびにマックフェイルらの双方に対して，再度ブルーマーが反論を行っている（Blumer, 1980）。なお，この論争は，「シンボリック相互作用論史上の一大事件」を構成する，ブルーマーと批判者との間に交わされた諸論争のクライマックスとしての位置づけを有するものであるが，そうした諸論争の経緯と全容については，伊藤，1998年が詳しい。

13）ブルーマーによるこうした「適応」の捉え方は，プラグマティズムの思想，ならびにそれより派生した機能主義心理学の思想から継承されたものである（Blumer, 1931; Hammersley, 1989, p.44, p.46; Morrione, 1988）。

14）ブルーマーのシンボリック相互作用論において，人間（およびその人間が行う行為）とは如何なるものと把握されているのか，ということについてよく参照される文献に，メルツァーらの研究（Meltzer et al., 1975）があるが，メルツァーらは，この研究において，ブルーマーのシンボリック相互作用論における人間観ならびに行為観を，次のように特徴づけている。すなわち，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，人間の行動とは，それを観察する他者から見て，本来的に予測不可能なものと捉えられている。では，何故に予測不可能なものと捉えられているかと言えば，そうした行動が外的刺激によってではなく，内的刺激すなわち「衝動」（impulses）によって生じるもの，とブルーマーにおいては捉えられているからである，と（Meltzer et al., 1975, p.62）。とはいえ，こうしたメルツァーらの特徴づけは，上記のブルーマー自身による説明を見ても，妥当性を欠くことがわかる。そもそも，ブルーマーのシンボリック相互作用論において，人間の行動とは，外的・内的な要因（刺激）によって引き起こされるものと捉えられているわけではない。むしろ，ブルーマーは，まず何よりも，人間の行動の原因を，外的な要因か内的な要因かの何れかに帰属させようとする二分法的な考え方それ自体を退ける立場に立っている（Blumer, 1969b, p.14＝1991

年，17－18頁）。シンボリック相互作用論において，人間の行為（適応活動）を方向付けるものとされているのは，あくまで，その人間の解釈ないしは定義なのであり，その人間に作用する（とされる）内的・外的な刺激それ自体ではない（片桐，1996年，12頁；徳川，1998年，参照）。また，ブルーマーにおいては，そうした刺激が，その人間（の行為）に対して，どのように作用するか（もしくは作用しないか）は，その人間の解釈・定義（＝「状況の定義」）の如何にかかっているものと捉えられている。

15）とはいえブルーマーは，この「プロセス」に関する詳細な分析を行ってはいない。ミードの「役割取得」の議論については，ここではさしあたり，山尾，1996年を参照。なお，ブルーマーは，その後の論考において，上記三つの段階に先立つ段階として，「準備段階」（preparatory stage）（＝「意味なき模倣」（meaningless imitation）の段階）を提示している（Blumer, 1993, p.187）。

16）本論の参照・引用文献リストに掲載されている，船津の全著作を見る限り，ブルーマーのこの概念に対する言及はない。リストに掲載されている他の邦文献を見ても，この概念に対する言及は見られない。この概念に対して明確な言及を行っているのは，参照・引用文献リストに掲載されている文献のなかでは，マリオーネの論考（Morrione, 1988）のみである。

17）Blumer, 1977＝1992, p.155; 1980, p.410. このように，ブルーマーは，「パースペクティブ」というものを，ある一定のものの見方ないしは解釈枠組みと捉え，こうした「パースペクティブ」理解をミードから継承したものとしているが，徳川によれば，殊，ミード理解という観点からするならば，ブルーマーのこうした「パースペクティブ」把握は妥当性を欠くかもしれない。徳川によれば，ミードにおいて「パースペクティブ」とは，単なるものの見方ではなく，“there in nature” に客観的に存在する関係性をあらわす概念として提示されているものであるという（徳川，1993年，25頁，30頁，31頁，36頁）。

なお，ブルーマーにおいては，この「パースペクティブ」という概念は，「概念」（concept）と同義で用いられており，それをブルーマーは，「常識的概念」（commonsense concept）と「科学的概念」（scientific concept）の二種に大別している（Blumer, 1931＝1969a, pp.160－163＝1991年，209－213頁）。彼の概念論については，別稿を用意したい。

18）皆川も言うように，シンボリック相互作用論，およびその知的源泉となったシカゴ学派社会学においては，人間を「ものそれ自体（thing itself）とは異なった『人間の世界』をつくりだし，その世界に生きている」存在と捉えることが，その立論の前提となっている（皆川，1989年，63頁）。

19）なお，シャーロンによれば，こうした立論は，何もブルーマーのシンボリック相互作用論に限られたものではなく，シンボリック相互作用論一般に前提とされているものでもある。シャーロンは，その前提について以下のように述べている。

「仮に，ある人間の面前に対象（object）が物的な形態をとって存在していたとしても，そうした対象は『ありのままの形で』（in the raw）人間に見られているわけではない。そうではなく，人間は，その対象を，何らかのパースペクティブを通してのみ見ることが出来るのである」（Charon, 1989, p.37）。

20）おそらくは，Mead, 1917に基づくものと思われる（Blumer, 1977＝1992, p.157）。

21）Morrione, 1988, p.4. なお，こうした「一般化」の洗練・改良が，人間の環境に対するコントロール力の増大をもたらす（Blumer, 1931, 参照）。

22）船津は，ブルーマーの「自己相互作用」の議論に関して，一方でそれが，ミードの「主我」概念を明確にする手段を提供したと評価しつつも，他方で，ブルーマーの分析枠組みにおいては，「〔行為者による〕『解釈』がどのようになされるのか，また『解釈』の妥当性が如何にして知られるのかについては何も触れられていない」（船津，1989年，224頁）と論難しているが，まさにこの「語り返し」という知見は，こうした指摘に対する有力な回答

であると言えよう。

23）本来，科学論の文脈における知見である，この「語り返し」という概念を，社会理論の文脈に導入し，その意義を明らかにした論考として，ミード研究の文脈において，小谷の議論（小谷，1989年）が示唆に富む。

24）本来，シンボリック相互作用論とは，行為者によるフリーハンドな解釈や定義を強調する理論なのではなく，まず何よりも，そうした解釈や定義が，ある一定の「パースペクティブ」に基づいてなされている，ということを強調する理論なのである。この点についてはCharon, 1989を参照。

25）本章で明らかにされた，ブルーマーのシンボリック相互作用論における「人間と社会的・物的環境との関係」に関する立論は，E.C. ヒューズのそれとも符合する。皆川がヒューズを引いて言う「＜絶えず動いているもの＞と＜固定されたもの＞ないしは＜絶えず固定化してゆくもの＞との相剋」（皆川，1989年，61頁）とは，まさに本章で明らかにされた，ブルーマーのシンボリック相互作用論における「人間と社会的・物的環境との関係」を捉えるに相応しい表現であると思われる。この表現の内実については，皆川，1989年，61−64頁，67−68頁を参照のこと。

26）本章第３節注14を参照のこと。

27）なお，ブルーマーの別稿を見る限り，ブルーマーにおいては，この「完結」の結果として，その人間にとっての新たな「知覚」が，すなわち新たな「パースペクティブ」（→「対象」）が形作られるものと捉えられている（Blumer, 1931＝1969a, p. 155＝1991年，203頁）。

第２章

１）拙稿（桑原，1998年，149−150頁）。「〔社会学とは〕社会（文化も含め）の構造と機能，変動と発展を人間の社会的行為とかかわらせながら，固有の概念・方法を用いて理論的・実証的に究明し，歴史的・社会的現実を貫く法則を明らかにして，現実の諸問題の解決に寄与しようとする社会科学の一部門をいう」とは，鮎川が「定評がありもっとも普及していると思われる」と捉える，ある社会学の辞典の「社会学」の項目から，社会学の定義として鮎川が引用・参照したものであるが（鮎川，1994年，184頁），鮎川はこの定義を，社会学という学問のあいまいさを象徴する説明と捉えている。とはいえ，上記の定義は，別様の捉え方をするならば，「社会・・・・を人間の社会的行為とかかわらせながら・・・・理論的・実証的に究明し」とあるように，この学問が「個人と社会との関係」を明らかにしようとする営みであることを示唆しているものと捉えることも可能である。事実，この辞典の改訂版においては，「社会学」の項目の後半部に「・・・・社会学の主題は個人と社会の関係にある」（濱嶋，1997年，248頁）と記されている。その「関係」の内実とは，一言で言うならば，「個人が社会をつくり，社会が個人をつくる」という「循環過程」であると定義し得るが（青井，1993年，600頁），本論が，ブルーマーのシンボリック相互作用論によって解こうとしているのも，まさにこの循環過程の内実に他ならない。なお，社会学の根本問題として，「個人と社会との関係」を措定し，それを軸に「社会学」を再構成しようとする，昨今のわが国の社会学界における明示的な取り組みとして，東北社会学会，1995年を参照。

２）船津，1993年a，56頁，参照。なお船津は，別の文献において，パーソンズ社会学における個人と社会との関係を次のように捉えている。

「D・ロングによれば，現代社会学における人間の捉え方は，『社会化過剰的人間観』（over-socialized conception of man）として規定される。T・パーソンズを中心とする現代社会学は，人間は社会という鋳型にはめ込まれ，個性や独自性を奪われ，画一化された存在として考えられている。それはあまりにも社会化されすぎた人間のイメージに囚われている。・・・・パーソンズ社会学においては，人間による『社会規範の内面化』のメカニズムを解明することが，その中心的テーマとなっている。そのことから，社会の維持，安定を旨として，人間は社会化によって既成社会の

中に組み込まれてしまう存在として描かれる。そして，人間が社会から逸脱したり，反抗したりする場合には，必ず社会統制〔補注[3]〕が加えられると考えられている。その理論は，きわめて統合的イメージの強いものとなっている」（船津，1983年，37頁）。

なお，船津による，こうしたパーソンズ社会学における「個人と社会との関係」把握は，Wrong，1961＝1970，p.32，pp.33－34，p.40に基づいているものと思われる。また，こうした人間観に対して，ロングの提示する人間観が，「社会的な存在ではあるが，完全に社会化された存在ではない」（social but not entirely socialized）ものと人間を捉える見方である（Wrong，1961＝1970，pp.38－40）。

3）ブルーマーは，別の論考において，「シンボリックな相互作用」を，個々人の解釈に媒介された社会的相互作用と捉え，そうした媒介は「刺激と反応の間に解釈の過程を挿入することと等価なこと」であると捉えている（Blumer，1962＝1969a，p.79＝1991年，102頁）。この説明を踏まえるならば，その対極に位置する「非シンボリック相互作用」を，そこにおいて個々人が刺激－反応的に反応し合っている社会的相互作用，と描写しても問題ないであろう。

4）那須，1995年b，93－94頁，参照。後に見るように，ブルーマーのシンボリック相互作用論においては，「有意味シンボル」とは，「共通の定義」と同義なものとして扱われている。すなわち，自他間において，共有されている何かを指している。

5）逆に言うならば，人間間の社会的相互作用を概念化するにあたっては，そこに参与する個々人を，互いに相手とは異なった異質な存在と捉えなければならない。社会的相互作用に参与する個々人間の異質性を前提とした上で，人間間の社会的相互作用を概念化しなければならない，という点については，徳川，1992年を参照。

6）拙稿（桑原，1998年，161－162頁）。

7）船津による有意味シンボル論（船津の言葉で言えば「意味のあるシンボル」論）は，まさにこの種の循環論に陥っている。この点については，後に詳しく述べる（補注[4]）。

8）ブルーマーは，シンボリック相互作用論の文脈において，人間間の社会的相互作用を「非シンボリック」なレベルと「シンボリック」なレベルという，二つのレベルにおいて生じているものと捉えつつも，前者の「非シンボリック」なレベルにある相互作用を正面から取り上げて議論することはなかった（那須，1995年b，90頁，参照）。とはいえ，彼による集合行動論の理論化においては，それとは反対に，この相互作用（正確には「刺激的相互作用」（interstimulation））には，「シンボリック」なレベルにある相互作用と対等な，否それ以上の重要性が与えられている。ブルーマーの集合行動論については，植村，1989年を参照。

9）なお，この「定義」を，個人の内に内在化された社会的相互作用としての「自分自身との相互作用」（＝「自己相互作用」）において，それを行う個人が自分自身に対して行う場合，それは「意味付与」（「意味」の付与，すなわち自分が行為するその様式を定める営み）と呼ばれる。すなわち，それは，自分が如何に行為するべきかに関する表示を，その個人本人が自分自身に伝達することを意味する。

10）Blumer，1962のタイトル。

11）これは前節での「身振り」に関する議論においても述べられていた。

12）拙稿（桑原，1998年，159頁）。

13）Blumer，1953＝1969a，p.111＝1991年，144頁，参照。

14）たとえば，船津，1993年a，53頁；1995年，7頁；宝月，1984年，87頁；1990年，117頁；伊藤，1995年a，120頁；安川，1993年，などを参照。

15）筆者の管見する限り，わが国のシンボリック相互作用論理解において，こうした「考慮の考慮」という現象を明示的に考察した研究はない。ブルーマーの立論に潜む，こうした現象に着目した数少ない論者として，N．ルーマン（Luhmann，1984＝1995年，566－573頁）が挙げられる。本論で言う「考慮の考慮」とは，ルーマンの言う「期待の

期待」に相当するものと思われるが，そうしたルーマンの「期待の期待」に関するわが国の研究として，佐藤，1995年を参照。なお，こうした現象を，明示的にシンボリック相互作用論のパースペクティブから考察した海外の論考として，ルーマンが挙げているものに，Blumer, 1953とGlaser and Strauss, 1964とSheff, 1967がある（Luhmann, 1984＝1995年，938－939頁,参照）。とはいえ，私見では，こうした「考慮の考慮」という現象への着目は，何も目新しいものではなく，既に，C. H. クーリーの「鏡に映った自己」(looking-glass-self）概念に明示されているものでもある(Cooley, 1902＝1970, p.184)。

16）なお，社会的相互作用においては，個々の行為者は，相手がどのような存在であるのかのみならず，そうした相手から見て自分がどういう存在であるのか（また，自分の行為がどのように受け止められているのか）をも想定することを余儀なくされる，とする立論は，社会システム理論においても提示されている。この点については，小松，1996年；1997年を参照。

17）では，そうした「有意味シンボル」の成立を可能とするような「考慮の考慮」という解釈的営みは如何にして可能となるのか。それは純粋に個々人の主観に押し込められて良いものなのか。その点については，次節で詳しく述べる。

18）なお，ここで，個人による「他者たちの集団」からの，「解釈の道具」の獲得は，決して，ダイレクトになされているものと捉えられてはならない。そうした道具は，あくまで，その個人の既存のパースペクティブを通して間接的に獲得されるものと捉えられなければならない。というのも，本論第1章第4節で明らかにされたように，人間は，自らを取り巻く社会的・物的環境（そのなかには，当然，「他者たちの集団」も含まれよう）を，ある一定のパースペクティブを通してしか捉えることができないからであり，逆に言うならば，環境（>「他者たちの集団」）からその個人に対して寄せられる種々の影響もまた，すべて，その個人の既存のパースペクティブを通して，間接的にしかその個人には与えられないからである。如何なる影響も，「解釈主体の「指示」〔＝自己表示〕というフィルターをくぐる」(井上，1988年，37頁）ことを免れ得ない。

なお，先に，本論第1章第2節で見た，ルイスによる，ブルーマーの自己相互作用概念に関する批判（Lewis, 1976＝1992, p.148）と，それに対するブルーマーの反論（Blumer, 1977＝1992, p.154）とを対照する限り，ブルーマーは，「社会構造」(social structure）を，「他者たちの集団」の範疇に入るものと捉えていることになる。

かねてより，ブルーマーのシンボリック相互作用論に対して，それが非構造的偏向に陥っている，とする批判が寄せられてきた。例えば，後藤は次のように述べている。

「・・・・ブルーマー的なシンボリック相互作用論における構造的視野の不足という問題がある。・・・・ブルーマーの社会理論は，さまざまな存在の『過程』としての性質を強調するあまり，いわば，すべてを過程的なものごとに帰着させてしまい，比較的安定的な構造としての社会や社会的相互作用を論じることが少なかった。・・・・そこで，とりわけシカゴ学派のシンボリック相互作用論には，構造的な視点が欠如しており，社会構造や制度・組織などの構造的な社会的カテゴリーを正当に扱うことができないという批判が，早くから行われていた」(後藤，1991年，296頁)。

こうした批判が寄せられてきていることを考えると，ブルーマーにおける「社会構造」把握を検討することが必須の課題となろうが，ブルーマーの「社会構造」把握の解明については，別稿を用意したい。

第3章

1）こうした社会把握は，吉原の言う「均衡論的変動論」の立場に相当しよう。吉原によれば，均衡論的変動論とは，社会というものを，「Organization から Disorganization へ，さらに Reorganization に至る一連のプロセス」と捉える立場をさすが，こうした社会把握は，まぎれもなく，シ

カゴ学派社会学より継承されたものである（吉原，1994年，70頁）。なお，こうした立場に立つシカゴ学派社会学の文献として Zorbaugh, 1929を参照。

2）田中，1971年，347頁。

3）船津，1976年，20頁。なお，村井もまた，シンボリック相互作用論に対して同様の捉え方をしている（村井，1974年）。

終章

1）それを考えると，ブルーマーによる sensitizing concept という表現よりも，デンジンの sensitizing-a-concept という表現（Denzin, 1970, p.455）の方がその性格を的確に表現しているものと思われる。なお，感受概念の性格を的確に描写したわが国の論考として，佐藤，1992年，77−82頁を参照。

2）Blumer, 1969b, p.46, pp.47−52＝1991年，59頁，60−66頁。ちなみに，こうしたブルーマーの研究手法論については，これまで，それが，具体的な分析方法を備えていない，とする批判や（船津，1976年，44頁；那須，1995年 a，45−46頁），「見て確認するだけの経験主義」（look-and-see empiricism）である（Baugh, 1990）とする批判がなされてきた。たとえば下田は，この点について次のように批判している。

「要するにブルーマーの言わんとするところは，前もって構成された固定的な分析的概念や，理論やモデルを，経験的世界に無理矢理あてはめて，それによって世界を理解してはならないということ，研究者は直接経験的世界を吟味して，その上で分析的諸要素の意味やその関係を確定せよ，ということに尽きる。そこには具体的な分析の方法と言えるほどのものは何も準備されていない」（下田，1987年，71頁）。

このように評した上で，下田は，ブルーマーの研究手法を，「日常言語」と「社会学原語」との対応を求める「経験主義的方法論」と定義している（下田，1987年，71頁，362頁）。こうした批判に対して，ブルーマーのこの自然的探求法なる研究手法を再検討し，こたえることは，本論の冒頭でも述べたように，本論の趣旨ではないため差し控えるが，こうした批判にこたえうる著作として，デンジンの論考（Denzin, 1989a）が挙げられる。なお，わが国において，ブルーマーのこの研究手法を詳細に検討した論考として，那須，1984年が挙げられる。

3）その例外的存在として，伊藤，1993年を参照。

4）宝月，1990年，130−131頁。なお，以下の論述は，筆者の日本社会学会大会での学会報告に基づいている（桑原　司，「コミュニケーションへのシンボリック相互作用論からの再接近」，第71回日本社会学会大会，学史・学説 2，一般報告，於：関西学院大学，1998年11月22日 ＝*http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/report.htm*）。

5）この点については，藤沢，1989年，80−86頁を参照。なお，こうした「知っている」把握が，ブルーマーの議論と符合する，とする点については，皆川，1989年，62−63頁を参照。

6）ストラウスらの提示する覚識文脈は，ある一定の変数の組み合わせにより編み出されたものである。彼らが用意した変数とは，二項対立としての 1）「二人の相互作用者」と 2）「虚偽を行うか否か（覚識の承認）」，そして三分法としての 3）「覚識の程度」（気づいている，疑っている，気づいていない）と 4）「アイデンティティ」（相手のアイデンティティ，自分自身のアイデンティティ，相手の目に映った自分自身のアイデンティティ）である。これらを全て掛け合わせると，論理上，36通りの覚識文脈が成立するわけであるが，そのなかより，彼らが経験的に妥当なものと判断した「文脈」が，以下に見る四つの覚識文脈である（Glaser and Strauss, 1964, p.678）。

7）なお，ストラウスらは，分析の焦点に据えてこそいないものの，「覚識のない文脈」（unawareness context）という状況が経験的に存在することを指摘している（Glaser and Strauss, 1964, p.679）。

8）Glaser and Strauss, 1964, pp.673-674. なお，こうした「共通の定義」把握については，Scheff,

1967も参照。シェフはこの論考において，相互作用に関わる自己と他者とが，互いに「彼らがあることを認識していることを私たちは認識している」(we recognized that they recognized it) 状態を「相互主観的な一次の合意」(first-level-co-orientation)（訳語については，後藤，1999年，3頁，参照）とし，「私たちがあることを認識していることを彼らが認識していることを私たちは認識している」(we recognized that they recognized that we recognized it) 状態を「相互主観的な二次の合意」(second-level-co-orientation) と捉え，後者をより高次の「合意」(consensus) 成立段階と捉えている (Scheff，1967＝1970，p. 353)。またこれが第三次，第四次，第五次・・・・第ｎ次と無限後退してゆくことによって，両者の合意の状態が「完全な合意」(complete consensus) に限りなく近づいてゆくものとシェフは捉えている (Scheff, 1967＝1970, pp.354－355)。

9）「研究者の研究行為 (Research Act) 自体が，研究者と行為者の相互作用において成り立っている」（船津，1976年，82頁）。

10）それを設定する上で，ストラウスらの議論が参考となる。彼らは，自らが形成する社会理論を，対象者たちが互いに相手と相互作用を行うための道具と捉え，結果として成立した理論的知見を，対象者が活用することで，より効果的に既存の相互作用を継続させることが出来るか否かで，その理論の経験的妥当性の如何をはかろうとしている。詳しくは，Glaser and Strauss, 1965, pp.259-273＝1998年，267－280頁を参照のこと。

11）本論で浮き彫りにされた社会的相互作用把握が，果たして経験的な妥当性を持ち得るか否か，別言するならば，経験的領域における社会的相互作用を分析する分析枠組みとしてその有効性を発揮し得るか否か，その点を，まさしく「行為者の観点」からのアプローチにより，明らかにすることが，今後のわれわれの必須の作業となる。そうした作業を行う上で，ストラウスらの一連の研究 (Glaser and Strauss, 1964; 1965) が示唆的である。ストラウスらは，1964年の論考において，人間間に生起する社会的相互作用を，互いに相手が不可視的な存在となっている自己と他者とが，「考慮の考慮」を駆使しつつ，互いに「相手のアイデンティティ」と「相手の目に映った自分自身のアイデンティティ」の双方を探り合う過程と捉え，その過程を，先に論じた四つの覚識文脈をもとに分析している。またそうした社会的相互作用把握を，1965年の著作において，終末期現場をフィールドに検証している。なお，ストラウス理論の全体像，および彼らの覚識文脈を議論したわが国の主な研究として，藤沢，1989年；1995年を参照。また，ストラウスらによる終末期現場をフィールドとした研究成果の，日本の医療現場の研究への適用を考える上で，中川，1996年；森岡，1996年が示唆的である。

12）Charon, 1989, pp.11－21.

補注

1）アメリカの社会学者，社会心理学者。シカゴ大学およびカリフォルニア大学バークレー校で教鞭をとる。アメリカのプラグマティスト，G.H. ミードの思想をもとに，シンボリック相互作用論を展開。彼の業績は大別して，「シンボリック相互作用論（社会学・社会心理学理論）」，「集合行動論」，「社会問題」，「マス・コミュニケーション」，「世論」，「流行」などの研究領域に分けられる（船津，1993年 b，参照）。

2）「コミュニケーションとは，通常，言語・映像・身振りその他の記号を媒介として，知識・感情・意思などの精神内容を伝達しあう，人間の相互行為過程をさす。これには，個人の思考や反省のように，個体内部で行なわれるコミュニケーションと，個体間でのコミュニケーションが含まれる」（長田，1981年，93頁）。シンボリック相互作用論では，前者のコミュニケーションを，「自己相互作用」(self-interaction) と，そして後者のコミュニケーションを，「社会的相互作用」(social interaction) と呼んでいる。

3）「・・・・社会および集団が，その秩序を維持するために，内部に生じた緊張や逸脱行動を処理

して，均衡を回復する過程・・・・」（長田，1981年，168－175頁）。

4）なお，付言するならば，後に見るように，船津の議論は，何か（有意味シンボル）を使えば，即座に，一方から他方へと同一の何か（ここでは同一反応，ないしは同一の意味）が伝わる，という一種の弾丸理論ないしは皮下注射モデル的な発想を想起しかねないものとなっている（桑原，1998年，151頁）。すなわち，「ある刺激〔この場合は，有意味シンボル〕が即効的にある反応〔同一反応〕を呼び起こす」という「皮下注射的効果論」（濱嶋，1982年，324頁）を想起しかねないものとなっている。とはいえ，人間間のコミュニケーションを取り扱うに際して，一方が他方に送る何か（たとえば情報）が，そのまま他方に受け取られると考えてはならない，という視点は，まさにシンボリック相互作用論の枢要点であったはずである。すなわち，情報の送り手（たとえば，マスコミ，ラジオ放送，選挙キャンペーン）から受け手へと送られてくる情報が，如何なるものとして受け手に受け取られるかは，まさに受け手の解釈の如何にかかっている。こうした，いわゆる弾丸理論的発想を排したコミュニケーション把握の根拠として提示されていたのが，周知の「自己相互作用」ないしは「解釈過程」の議論だったはずである。であるならば，その「送り手」が，まさに人間であっても，同様のコミュニケーション把握がなされなければならない。すなわち，個人A（送り手）が個人B（受け手）に送った情報が，如何なる情報として受け手に受け止められるかは，まさに受け手の解釈如何で決められる，と捉えられなければならないこととなる（桑原，1998年，151頁）。

5）具体的に理解するために，社会学者が用いる概念ないしは社会学言語を参照されたい。例えばある辞典には，「ISC・・・・アイとミー・・・・アノミー・・・・一般化された他者・・・・AGIL図式・・・・オピニオン・リーダー・・・・鏡に映った自己・・・・共有世界・・・・近代化・・・・計算可能性・・・・形式合理性・・・・ゲゼルシャフト・・・・ゲマインシャフト・・・・行為・・・・産業社会学・・・・刺激＝反応理論・・・・社会的行為・・・・象徴・・・・象徴的相互作用・・・・上部構造・・・・相互行為・・・・論理的行為・非論理的行為・・・・選択的知覚・・・・」（濱嶋，1982年，1－573頁）等々の用語がある。

参照・引用文献

Alexander, J., 1987, *Twenty Lectures*, Columbia University Press.

青井和夫，1993年，「社会学」，森岡清美他編，『新社会学辞典』，有斐閣，599－602頁。

Athens, H.L., 1993, Blumer's Advanced Social Psychology Course, *Studies in Symbolic Interaction*: 14, pp.155－162.

鮎川　潤，1994年，『少年非行の社会学』，世界思想社。

Baugh, K. Jr., 1990, *The Methodology of Herbert Blumer*, Cambridge University Press.

Blumer, H.G., 1931, Science Without Concepts, *American Journal of Sociology*: 36, pp.515－533＝Blumer, 1969a, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice-Hall, pp.153－170＝1991年，後藤将之訳，『シンボリック相互作用論――パースペクティヴと方法――』，勁草書房，200－223頁.

……, 1939, *Critiques of Research in the Social Sciences:An Appraisal of Thomas and Znaniecki's "The Polish Peasant in Europe and America"*, Social Research Council＝Blumer, 1969a, pp.117－126＝1991年，後藤訳，152－164頁.

……, 1947, Sociological Theory in Industrial Relations, *American Sociological Review*: 12, pp.271－278.

……, 1953, Psychological Import of the Human Group, Sherif, M., and Wilson, M.O., (ed.), *Group Relations at the Crossroads: The University of Oklahoma Lectures in Social Psychology*, Harper and Brothers, pp.185-202＝Blumer, 1969a, pp.101－116＝

1991年, 後藤訳, 131－151頁.

……, 1954, What is Wrong With Social Theory ?, *American Sociological Review*: 19, pp.3－10=Blumer, 1969a, pp.140-152=1991年, 後藤訳, 182－199頁.

……, 1955, Attitudes and the Social Act, *Social Problems*: 3, pp.59－65＝Blumer, 1969a, pp. 90－100＝1991年, 後藤訳, 116－130頁.

……, 1962, Society as Symbolic Interaction, Rose, A.M., (ed.), *Human Behavior and Social Processes*, Houghton Mifflin, pp.179－192=Blumer, 1969a, pp.78-89=1991年, 後藤訳, 101－115頁.

……, 1966, Sociological Implications of the Thought of George Herbert Mead, *American Journal of Sociology*: 71, pp.535－544= Blumer, 1969a, pp.61－77=1991年, 後藤訳, 78－100頁.

……, 1967, Reply to Woelfel, Stone and Farberman, *American Journal of Sociology*: 72, pp.59－68=Hamilton, P., (ed.), 1992, *George Herbert Mead critical assessments vol. 2 section 2: Mead and Symbolic Interactionism*, Routledge, pp.51－52.

……, 1969b, The Methodological Position of Symbolic Interactionism, Blumer, 1969a, pp.1－60=1991年, 後藤訳, 1－77頁.

……, 1975, Exchange on Turner, *Sociological Inquiry*: 45, pp.59－62=Hamilton (ed.), 1992, pp.120－126.

……, 1977, Comment on Lewis, *Sociological Quarterly*: 18, pp.285－289=Hamilton (ed.), 1992, pp.151－157.

……, 1980, Mead and Blumer: The convergent methodological perspectives of social behaviorism and symbolic interactionism, *American Sociological Review*: 45, pp.409－419.

……, 1993, Athens (ed.), Blumer's Advanced Course on Social Psychology, *Studies in Symbolic Interaction*: 14, pp.163－193.

Cooley, C.H., 1902, *Human Nature and the Social Order*, Chares-Scribner's Sons＝1970, *Human Nature and the Social Order*, Scocken Books.

Coser, L.A., 1976, Sociological Theory from the Chicago Dominance to 1965, *Annual Review of Sociology*: 2, pp.145－160.

……, 1978, American Trends, Bottomore, T., and Nisbet, R., (ed.), *A History of Sociological Analysis*, Basic Books＝1981年, 磯部卓三訳,『アメリカ社会学の形成』, アカデミア出版.

Charon, J.M., 1989, *Symbolic Interactionism: an introduction, an interpretation, an integration, third edition,* Prentice-Hall.

Denzin, N.K., 1970, The Methodologies of Symbolic Interaction: A Critical Review of Research Techniques, Stone, G.P., and Farberman, H.A., (ed.), 1970, *Social Psychology through Symbolic Interaction*, Xerox College Publishing, pp.447－465.

……, 1989a, *The Research Act*, Prentice-Hall.

……, 1989b, *Interpretive Interactionism*, Newbury Park＝1992年, 片桐雅隆他訳,『エピファニーの社会学――解釈的相互作用論の核心――』, マグロウヒル出版.

江原由美子, 1986年,「『主体主義』批判の二様相――架場ミード論へのメタ理論的批判――」, 今津孝次郎他編,『現代社会学』vol. 12, No.1, アカデミア出版, 61－70頁。

Faris, R.E.L., 1967, *Chicago Sociology 1920－1932,* University of Chicago Press＝1990年, 奥田道大, 広田康生訳,『シカゴ・ソシオロジー：1920－1932』, ハーベスト社.

藤沢三佳, 1989年,「A. ストラウスの多元的相互作用論検討」,『ソシオロジ』第33巻 3 号, 社会学研究会, 79－94頁。

……, 1995年,「現代のシンボリック相互作用論者――A・ストラウス」, 船津　衛, 宝月　誠編,

『シンボリック相互作用論の世界』，恒星社厚生閣，61－72頁。
船津　衛，1976年，『シンボリック相互作用論』，恒星社厚生閣。
……，1983年，『自我の社会理論』，恒星社厚生閣。
……，1988年，「自我」，見田宗介他編，『社会学事典』，弘文堂，350－351頁。
……，1989年，『ミード自我論の研究』，恒星社厚生閣。
……，1993年，「ブルーマーの社会学とその『人間観』的基礎」，『社会学研究』第60号，東北社会学研究会，45－62頁。
……，1993年b，「ブルーマー」，森岡清美他編，1281頁。
……，1995年，「シンボリック相互作用論の特質」，船津，宝月編，3－13頁。
……，1996年，『コミュニケーション・入門』，有斐閣。
……，1998年a，「自我のゆくえ」，『社会学評論』第192号，日本社会学会，19－30頁。
……，1998年b，「ブルーマー『シンボリック相互作用論』」，見田宗介他編，『社会学文献事典』，弘文堂，517頁。
Glaser, B.G., and Strauss, A.L., 1964, Awareness Contexts and Social Interaction, *American Sociological Review*: 29, pp.669－679.
……，1965, *Awareness of Dying*, Aldine＝1988年，木下康仁訳，『「死のアウェアネス理論」と看護』，医学書院.
後藤将之，1991年，「解説：ハーバート・ブルーマーの社会心理学」，後藤訳，273－314頁。
……，1999年，『コミュニケーション論』，中央公論新社。
濱嶋　朗，竹内郁郎，石川晃弘編，1982年，『社会学小辞典〔増補版〕』，有斐閣。
……，1997年，『社会学小辞典〔新版〕』，有斐閣。
Hammersley, M., 1989, *The Dilemma of Qualitative Method: Herbert Blumer and the Chicago Tradition*, Routledge.
宝月　誠，1984年，「シンボリック相互作用論」，新睦人他編，『社会学のあゆみ パートII』，有斐閣，83－108頁。
……，1989年，「シカゴ学派のモノグラフの解釈――E・H・サザランドの作品をテキストにして――」，『社会学史研究』第11号，日本社会学史学会，1－20頁。
……，1990年，「シンボリック相互作用論」，中　久郎編，『現代社会学の諸理論』，世界思想社，113－138頁。
……，1995年，「シンボリック相互作用論の方法論的基礎」，船津，宝月編，135－144頁。
稲葉三千男，1973年，「解説」，稲葉他訳，『精神・自我・社会』，青木書店，349－353頁。
井上　俊，1988年，「日常生活における解釈の問題」，中村祥一編，『新版　社会学を学ぶ人のために』，世界思想社，31－50頁。
伊藤　勇，1991年，「G・H・ミードにおける『個人と社会』」，『社会学研究』第58号，東北社会学研究会，47－72頁。
……，1993年，「農民生活と意識動態」，細谷　昂他著，『農民生活における個と集団』，御茶の水書房，315－402頁。
……，1995年a，「シンボリック相互作用論における自我・精神論の展開」，船津，宝月編，112－122頁。
……，1995年b，「シンボリック相互作用論のルーツ――シカゴ学派」，船津，宝月編，14－24頁。
……，1998年，「シンボリック相互作用論とG・H・ミード――H・ブルーマーと批判者との応酬をめぐって――」，『社会学史研究』第20号，日本社会学史学会，99－111頁。
片桐雅隆，1989年，「つくられるものとしての社会」，片桐編，『意味と日常世界』，世界思想社，i－viii。
……，1991年，『変容する日常世界』，世界思想社。
……，1996年，『プライバシーの社会学――相互行為・自己・プライバシー――』，世界思想社。
加藤一己，1995年，「ミード言語論・シンボル論の含意――ミルズ，ブルーマー，ハバーマスをめぐっ

て――」，船津，宝月編，101－111頁。

木村邦博，1991年，「逸脱とラベリング」，小林淳一，木村邦博編著，『考える社会学』，ミネルヴァ書房，115－129頁。

Kinch, J.W., 1963, A Formalized Theory of the Self-concept, *American Journal of Sociology*: 68, pp.448－486.

小松丈晃，1996年，「ダブル・コンティンジェンシーの論理」，『社会学研究』第63号，東北社会学研究会，91－107頁。

……，1997年，「コミュニケーションにおける『理解』の問題」，佐藤　勉編，『コミュニケーションと社会システム――パーソンズ・ハーバーマス・ルーマン――』，恒星社厚生閣，291－309頁。

小谷　敏，1989年，「G・H・ミードとアメリカ社会――等質性のユートピアを越えて――」，片桐編，3－28頁。

桑原　司，1996年，「ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論再考――主観主義を越えて――」，『社会学年報』第25号，東北社会学会，81－101頁。

……，1997年，「ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考」，『文化』第60巻第3・4号，東北大学文学会，55－72頁。

……，1998年，「『考慮の考慮』と情報の駆け引き――コミュニケーションへのシンボリック相互作用論からの再接近――」，『社会学年報』第27号，東北社会学会，149－166頁。

……，2000年 a，『社会過程の社会学――ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考――』(1999年度，東北大学大学院文学研究科，博士学位論文)，関西学院大学出版会。

……，2000年 b，「シンボリック相互作用論序説 (1)――コミュニケーションの社会学理論――」，『経済学論集』第52号，鹿児島大学経済学会，165－210頁。

Lewis, J.D., 1976, The Classic American Pragmatists as Forerunners to Symbolic Interactionism, *Sociological Quarterly*: 17, pp.347－359＝Hamilton (ed.), 1992, pp.137－151.

Luhmann, N., 1984, *Soziale Systeme*, Suhrkamp＝1993年，佐藤　勉監訳，『社会システム理論（上巻)』，恒星社厚生閣；1995年，佐藤　勉監訳，『社会システム理論（下巻)』，恒星社厚生閣.

Maines, D.R., and Morrione, T.J., 1990, On the Breadth and Relevance of Blumer's Perspective: Introduction to his Analysis of Industrialization, Blumer, 1990, Maines and Morrione (ed.), *Industrialization as an Agent of Social Change*, Aldine, xi－xxiv＝1995年，片桐他訳，『産業化論再考――シンボリック相互作用論の視点から――』，勁草書房，5－24頁.

Martindale, D., 1960, *The Nature and Types of Sociological Theory*, Boston: Houghton Mifflin＝1970年，新　睦人他訳，『現代社会学の系譜』(下)，未来社.

McPhail, C., and Rexroat, C., 1979, Mead vs Blumer: the divergent methodological perspectives of social behaviorism and symbolic interaction, *American Sociological Reveiw*: 44, pp.449－467.

Mead, G.H., 1917, Scientific Method and Individual Thinker, Dewey, J., et al. (ed.), *Creative Intelligence: Essays in the Pragmatic Attitude,* Henry Holt and Co., pp.176－227＝1964, Reck, A.J., (ed.), *George Herbert Mead: Selected Writings*, University of Chicago Press, pp.171－211＝1941年，清水幾太郎訳，『創造的知性』，河出書房，159－221頁.

……, 1934, Morris, C.W., (ed.), *Mind Self and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*, University of Chicago Press＝1973年，稲葉他訳.

Meltzer et al., 1975, *Symbolic Interactionism*, Routledge & Kegan Paul.

皆川満寿美，1989年，「社会過程の社会学――ヒューズ」，片桐編，57－84頁。

森岡正博，1996年，「『死』と『生命』研究の現在」，

井上　俊他編，『病と医療の社会学』（岩波講座，現代社会学14），岩波書店，223－238頁。

Morrione, T.J., 1988, Herbert Blumer (1900－87): A Legacy of Concepts, Criticisms and Contributions, *Symbolic Interaction*: 11－1, pp.1－12.

村井忠政，1974年，「G・H・ミードとシンボリックインタラクショニズム」，『社会学評論』第96号，日本社会学会，44－62頁。

中川米造，1996年，「死にゆく者」，井上他編，187－202頁。

那須　壽，1984年，「“意味の社会学”序説―― H・ブルーマーの社会理論を主たる素材として（その2）――」，『新潟大学教育学部紀要』25巻2号，371－382頁。

……，1995年 a，「現代のシンボリック相互作用論者―― H・ブルーマー」，船津，宝月編，37－49頁。

……，1995年 b，「意味・シンボル・相互作用」，船津，宝月編，89－100頁。

長田攻一，1981年，『社会学の要点整理』，実務教育出版。

佐藤郁哉，1992年，『フィールドワーク』，新曜社。

佐藤　勉，1995年，「ニクラス・ルーマンの社会システム理論と現代社会学」，佐藤監訳，下巻，953－970頁。

Scheff, T.J., 1967, Toward a Sociological Model of Consensus, *American Sociological Review*: 32, pp.32－46＝Stone and Farberman (ed.), 1970, pp.348－365.

下田直春，1987年，『増補改訂版/社会学的思考の基礎』，新泉社。

Smelser, N., 1988, Social Structure, Smelser (ed.), *Handbook of Sociology*, Newbury Park, pp.103－129.

外林大作他編，1981年，『誠信　心理学辞典』，誠信書房。

Stryker, S., 1980, *Symbolic Interactionism*, The Benjamin/Cummings.

田中義久，1971年，「現代社会学における『個人と社会』」，田中訳，『個人と社会』，みすず書房，313－344頁。

東北社会学会，1995年，「特集　現代社会における個体性と社会性」，『社会学年報』第24号，東北社会学会，1－82頁。

徳川直人，1987年，「G・H・ミードにおける『関係』と『自我』」，『社会学年報』XVI，東北社会学会，69－86頁。

……，1992年，「異なる人間間のコミュニケーション」，船津　衛編，『現代社会論の展開』，北樹出版，148－155頁。

……，1993年，「G・H・ミードにおける『ディスコースの世界』の再構成に向けて」，『社会学年報』XXII，東北社会学会，21－38頁。

……，1998年，「『自由化』と稲作農家の論理および意味世界――北海道深川市メム地区での探求事例より――」，『村落社会研究』第4巻第2号，村落社会学研究会，22－33頁。

……，1999年，「農村でのフィールドワークにむけてのノート――SI 再考およびレトリックアプローチの示唆――」，1999年度第1回東北社会学会研究例会報告，4月24日。

富永健一，1995年，『社会学講義』，中央公論社。

……，1998年，「社会学理論におけるミクロ社会学の位置」，『社会学史研究』第20号，日本社会学史学会，43－54頁。

Turner, J., 1974, Parsons as a Symbolic Interactionist: A Comparison of Action and Interaction Theory, *Sociological Inquiry*: 44, pp.283－294＝Hamilton (ed.), 1992, pp.102－119.

植村貴裕，1989年，「大衆の社会学――ブルーマー」，片桐編，85－110頁。

Wallace, R.A., and Wolf, A., 1980, *Contemporary Sociological Theory*, Prentice-Hall＝1985年，濱屋正男他訳，『現代社会学理論』，新泉社.

Warshay, L., and Warshay, D., 1986, The Individualizing and Subjectivizing of George Herbert Mead, *Sociological Focus*: 19, pp. 177－188.

Wrong, D.H., 1961, The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology, *American Sociological Review*: 26, pp.183－199＝Stone and Farberman (ed.), 1970, pp.29－40.

山尾貴則，1996年，「G・H・ミード理論における『役割取得』概念の再構成」，『社会学年報』第25号，東北社会学会，149－166頁。

山崎達彦，1993年，「デュルケム社会学の『人間観』的基礎」，『社会学研究』第60号，東北社会学研究会，63－88頁。

山崎正一，市川　浩編，1993年，『現代哲学事典』，講談社。

安川　一，1993年，「自己相互作用」，森岡清美他編，545頁。

吉原直樹，1989年，「シカゴ・ソシオロジー再考のために」，『社会学史研究』第11号，日本社会学史学会，21－37頁。

……，1994年，『都市空間の社会理論』，東京大学出版会。

Zeitlin, I., 1973, *Rethinking Sociology,* Appleton-Century-Crofts.

Zorbaugh, H.W., 1929, *The Gold Coast and the Slum*, University of Chicago Press＝1997年，吉原直樹，桑原　司，奥田憲昭，高橋早苗訳，『ゴールド・コーストとスラム』，ハーベスト社.

文献目録・参考業績

http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/article3.htm を参照されたい。

凡　　例

1．出典の明記については，原則として以下の形式で行っている。

：邦書については，「著者名・編著者名」「発行年」「頁数」の順で記してある。

例　桑原，1997年，68－69頁。

：洋書に関しても，「著者名・編著者名」「発行年」「頁数」の順で記してある。但し，邦訳のあるものに関しては，原著の「著者名・編著者名」「発行年」「頁数」，邦訳の「発行年」「頁数」の順で記してある（例1）。なお，邦訳のみ参照の場合は，例2の形式で表記してある。

例1　Blumer, 1969b, p.2＝1991年，2頁.

なお，この場合，引用の訳文は訳者が適宜作成しており，そのため，訳文は必ずしも邦訳によらない。

例2　Faris, 1967＝1990年，16頁.

：また，リプリント版を使用している場合には，原著の「著者名・編著者名」「発行年」，リプリント版の「発行年」「頁数」の順で記してある。

例　Blumer, 1977＝1992, p. 154.

：また，同一著者の異なる文献を続けて参照・引用している場合には，邦書，洋書の如何に関わりなく，以下のような出典明記を行っている。

例　桑原，1997年；1998年，153頁。

：なお，参照・引用文献はすべて，本論末尾に「参照・引用文献」として一括して掲載している。その表記例は以下の通り。

例　船津　衛，1976年，『シンボリック相互作用論』，恒星社厚生閣。

例　桑原　司，1997年，「ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考」，『文化』第60巻第3・4号，東北大学文学会，55－72頁。

例　Zorbaugh, H.W., 1929, *The Gold Coast and the Slum*, University of Chicago Press＝1997年，吉原直樹，桑原　司，奥田憲昭，高橋早苗訳，『ゴールド・コーストとスラム』，ハーベスト社.

例　Glaser, B.G., and Strauss, A.L., 1964, Awareness Contexts and Social Interaction, *American Sociological Review*: 29, pp. 669－679.

例　Blumer, H.G., 1993, Athens, (ed.), Blumer's Advanced Course on Social Psychology, *Studies in Symbolic Interaction*: 14, pp. 163－193.

例　Blumer, H.G., 1967, Reply to Woelfel, Stone and Farberman, *American Journal of Sociology*: 72, pp. 59 − 68=Hamilton, P., (ed.), 1992, *George Herbert Mead critical assessments vol. 2 section 2: Mead and Symbolic Interactionism*, Routledge, pp. 51−52.

2．引用文中の〔　〕で囲まれているところは，引用者による補足のための挿入をあらわす。また引用文中の・・・・は，引用者による中略をあらわす。

3．引用文中の『　』は，引用文献が邦書である場合には「　」を，また洋書である場合には“　”をあらわす。なお，筆者による叙述および引用文において，傍点が付されているものは，筆者あるいは原著者による強調（洋書の場合はイタリック体で記されているもの）をあらわす。なお，引用文中の強調は，筆者による特別な注記のない限り，すべて原著者によるものである。

4．本論の注は，本文の末尾に一括して掲載している。